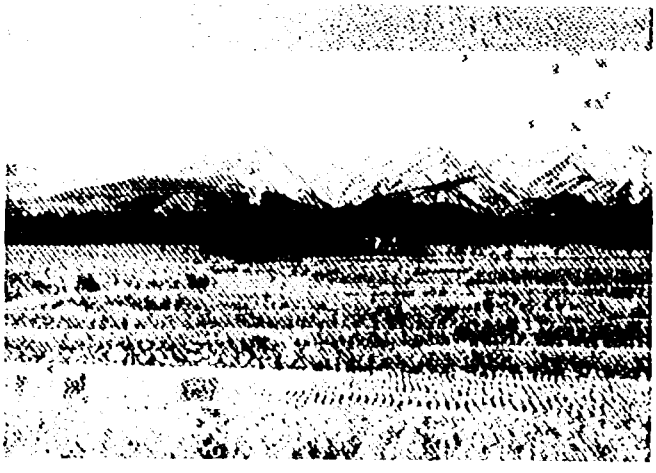
桝形遺跡調査報告書

1981

群馬県勢多郡宮城村教育委員会

桝形遺跡調査報告書



序

この報告書は、我々祖先の遺跡しかも一万年をこえる大昔に、人間がどのような生活をしていたのか、はかり知るすべもなかったことが、この発掘によって貴重な資料となり、学問的追求にすばらしい価値あるものであり、その報告書が刊行されたことはまことに喜ばしい次第であります。

桝形遺跡発掘に当っては、相沢先生が中心となり多数の皆さんが、師走も残り少ない時、しかも、赤城おろしが冷たく吹きすさぶ中を、遺跡をのこした遠い祖先の生活をさぐるべく、もくもくと発掘されていた姿が目に浮かびます。

私も、当時教育委員会におり、この遺跡発掘に若干のお伝いをしたものですが、わが宮城村にも石器時代から我々の祖先が住んでいたことを、この遺跡発掘によって立証され、いまさらながら驚きと厳粛な気持ちでいっぱいであります。

この報告書が、すばらしい貴重なものであることは申すまでもありませんが、相沢先生をはじめ発掘に協力された皆様に深い敬意と感謝を申し上げると共に、この報告書によって更に文化遺産の研究が進められることを願うものであります。

昭和56年8月

宮城村村長　　吉　田　時　雄

発刊に当って

新緑に映ゆる赤城山の上空をジェット機が飛び去って行く、見送る私の足下1.5mの土中から古代人の使用した石器が発掘されたのである。ジェット機と石器、極端な対照だが人間の知能の発達のよき象徴である。私は幸にも双方に接し得てまことに感慨に堪えない。

人間が火の利用を発見し石器を作り他の動物と全然異った生活を始めたのは何万年前か。この遺跡はそのことを解明する「極め手」となる貴重なものである。また宮城村にも石器時代から人間が住んでいたということをこの遺跡から知ることが出来ていまさらの如く厳粛な気持におそわれるのである。

この発掘の経過は本誌経緯の項に詳細に記述されている通りであるが事業主体村長主管教育委員会文化財調査委員協力のもとに実施された。師走の風の冷たい中にあって、全員とり憑かれたように掘り続けここに三百数十点に及ぶ石器が発掘されたのである。

その後相沢先生が病に倒れ報告書の刊行が遅延し遂に今日に至った次第である。

この発掘、刊行に協力された方々に深甚の謝意を表すると共にこの小冊子が先人の生活を偲ぶよすがになればまことに幸である。

宮城村教育委員会教育長　　前　原　秀　雄

例　　言

1．本書は昭和48年度の群馬県勢多郡宮城村大字苗ケ島字樹形に所在する村道改良工事に伴う「樹形遺跡」の調査報告書である。

2．本遺跡の発掘調査は、昭和26年9月22日から同年同月29日の間に実施された第一次調査があり、今回の発掘調査は第二次調査である。

3．発掘調査は、調査主体者を宮城村長田村定吉として、赤城人類文化研究所長相沢忠洋が調査担当者となり、地元考古学研究者、一般村民及び地元中学生の参加協力によってなされた。

4．発掘調査は、昭和48年12月21日から同年同月31日の11日間である。

5．本書の作成は、相沢忠洋の指導のもとに関矢晃が行ない、相沢千恵子がこれを補佐してなされたものである。

6．出土資料及び諸記録は、赤城人類文化研究所で整理保管している。

桝形遺跡目次

序

発刊にあたって

例　　言

1．発掘調査の経緯について……1

(1)　本遺跡の調査の歴史……1

(2)　今回の調査に至るまで……1

(3)　発　掘　日　誌……2

2．遺跡について……3

(1)　所在地及び立地……3

(2)　周辺の主要遺跡……3

3．発掘区について……5

4．層序について……5

5．遺構及び遺物の出土状況について……7

6．出土遺物について……9

7．考　　察……38

8．おわりにあたって……42

9．発掘調査参加者一覧……45

扉写真　桝形遺跡遠景（南方より）

図版・挿図目次

図版1　桝形遺跡遠景、桝形遺跡現況
図版2　発掘風景、発掘区全景
図版3　石器出土状況（No27、No28、No126）
図版4　石器出土状況（No316、No91）
図版5　桝形遺跡出土の細石刃
図版6　細石刃用石核
図版7　細石刃用石核、削器
図版8　小型石器等（彫器、掻器、削器、スキー状スポール、石刃）
図版9　石刃及び縦長剥片利用の削器
図版10　大型削器
図版11　No126チョッピングトール
図版12　チョッパー、ハンマーストーン

第1図　桝形遺跡とその周辺
第2図　遺跡付近地形図
第3図　発掘区平面図
第4図　桝形遺跡付近の層序
第5図　桝形遺跡出土の細石刃
第6図　細石刃用石核
第7図　細石刃用石核
第8図　舟底形石器、掻器（第一次発掘資料）
第9図　スキー状スポール、掻器、削器、石刃、彫器
第10図　削器
第11図　大型削器
第12図　削器
第13図　ハンマーストーン
第14図　No126チョッピングトール
第15図　石刃

第1表　桝形遺跡の石器組成及び石質区分表
第2表　桝形遺跡出土遺物一覧表
第3表　群馬県旧石器文化編年表

1.　発掘調査の経緯について

(1)　本遺跡の調査の歴史

昭和24年9月に相沢忠洋の発見した石器を契機に明治大学文学部考古学研究室により発掘調査が行われて、日本にも旧石器時代が存在したことが確認された岩宿遺跡（杉原　1956年）に相前後して、赤城山南麓の縄文時代早期遺跡を精力的に調査していた相沢忠洋は岩宿遺跡のほかにも数十の縄文時代以前の石器文化遺跡を発見した。

本遺跡も、その中の一遺跡であって、他の赤城南麓の旧石器文化がナイフ形石器やポイントを主体とするものが多いのに比して、大型の縦長剥片、舟底形石器、掻器等の石器が中心の本遺跡は、他の遺跡と石器組成が異なるので、古くから学界からも特異な石器文化の遺跡として注目されていた。

本遺跡が世に出たのも、発見者の手島光二、鎌塚清男両氏の功績が大きいのであるが相沢忠洋の地道な努力によるもので、小規模な発掘調査ではあるが昭和26年9月22日から同年同月29日までの第一次調査が行われ、昭和28年9月6日から同年9月10日、昭和29年8月、昭和29年11月、昭和33年にそれぞれ第一次調査の補完調査が相沢忠洋や鎌塚清男氏等の手で実施されている。

第一次及び補完調査のうちの昭和28年分、昭和29年分は、遺跡の性格を確認する発掘調査であり、補完調査のうちの昭和29年分及び昭和33年分は地層と層序の調査を目的になされたものである。

特に昭和33年分の調査は、関東ローム研究グループの関東ローム層の研究の一環として行われた。（関東ローム研究グループ　1965年）

以上の発掘調査は、相沢忠洋の第四紀連絡委員会懇談会昭和29年例会における報告があるが、特異な石器文化ゆえに、多くの調査報告書や論文等に引用、紹介されており、著名な遺跡となっている。（相沢　1957年、戸沢　1965年、杉原　1956年、1974年、芹沢　1974年、吉崎　1956年、1963年等）

なお、本遺跡の概要については、昭和48年9月発行の宮城村誌（宮城村役場発行）でも紹介されている。

(2)　今回の調査に至るまで

第一次調査においては、小規模な発掘調査であったために資料も少なく、遺構らしいものも確認されていなかったために本格的な発掘調査がまたれていた。

特に本遺跡を世に出した相沢忠洋は、既発掘調査部分は、台地の西側端の村道に並行して作られた側溝部分と松林の一部分であったため、遺跡の中心は既発掘部分の東に隣接する台地中

央を縦貫する道路直下にあると推定し、この道路直下を調査する日のあることを、第一次調査以来ずっと待ち望んでいたのであった。（相沢　1980年）

しかしながら、この道路は赤城南面道路から宮城村馬場方面に通ずる生活道路であったため、交通止めにして発掘調査をすることは不可能に近かったのである。

ところが、昭和48年秋に至って、この道路（宮城村道、二重橋～神東原線）の拡幅改良工事が施工されることになり、事前調査として発掘調査が実施されることになったのである。

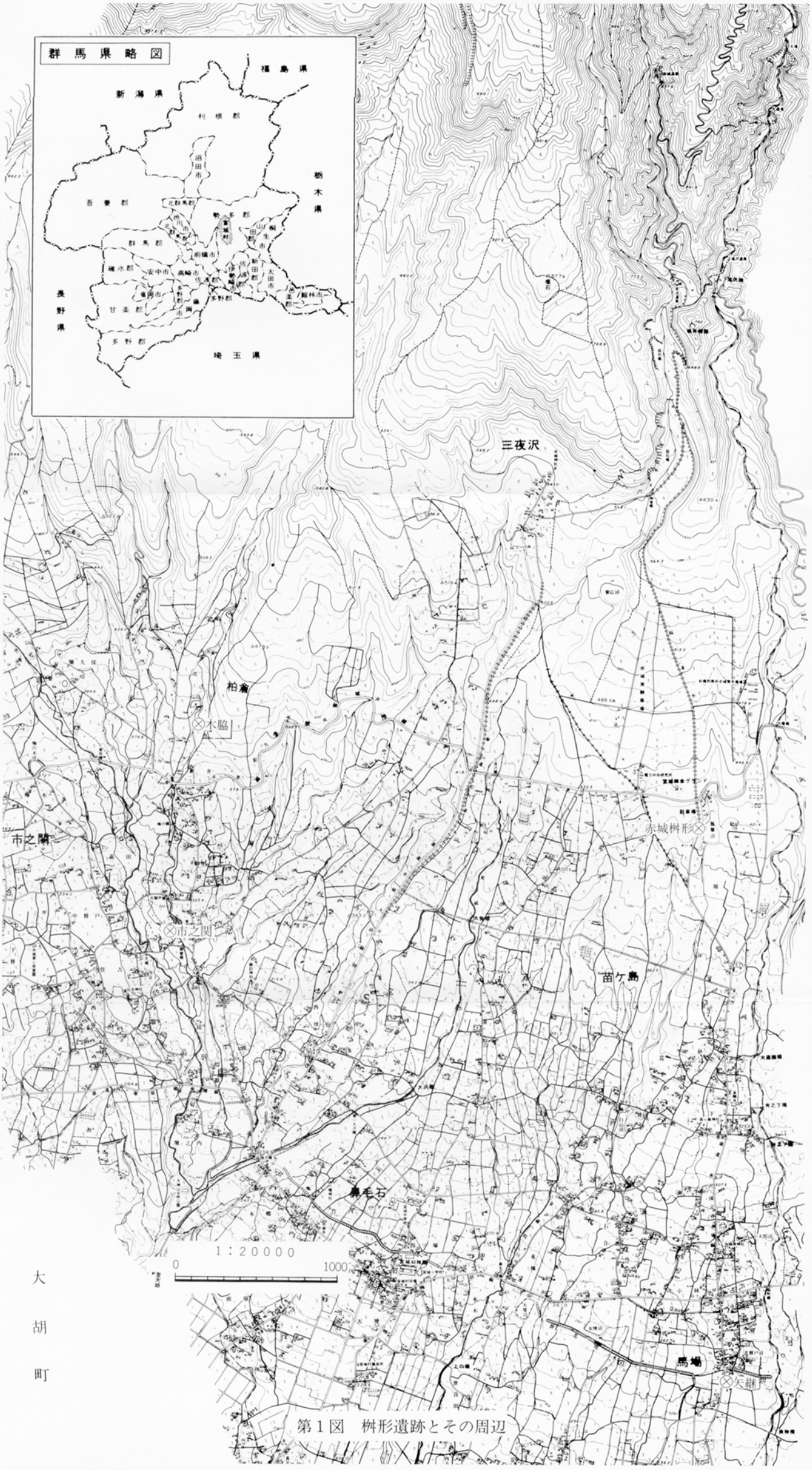
相沢忠洋が実に22年間も待ち望んでいた日が、ついにやって来たのである。

本遺跡の発掘調査の依頼は、当然のことのように工事主体者である宮城村長から、赤城人類文化研究所長の相沢忠洋になされたのである。

昭和48年10月から周到な準備のもとにかくして第２次の発掘調査が昭和48年12月21日から同年同月31日までの11日間実施されたのである。

(3)　発　掘　日　誌

月　日(曜日)	天　候	調　査　作　業　内　容
12／21　(金)	晴	発掘区を村道基点よりNo17～No20に設定し、まずNo18からNo17方向へ14ｍ×３ｍのトレンチを入れる。 初日にして、ローム層から細石刃、細石刃用石核、舟底形石器等の出土をみる。
12／22　(土)	晴	水糸張り、区割内残土整理、出土遺物に番号札をつける。
12／23　(日)	晴	トレンチ平面図作成、松林の中にＢトレンチ２ｍ×２ｍを設定。朝日新聞小島記者取材。
12／24　(月)	晴	区画内整理、出土状況写真撮影、遺物の原位置測量。朝日新聞に報道される。
12／25　(火)	晴	レベリング、東側へ拡張区２ｍ×２ｍを設定。
12／26　(水)	晴	東側拡張区を昨日に続き発掘、遺物出土状況撮影、北側へ拡張区１ｍ×1.3ｍを設定し、八崎軽石層まで発掘。
12／27　(木)	晴	トレンチ内整理、遺物出土状況撮影。正午～２時まで赤城高原センターにて教育委員会主催の発掘調査の報告会が開催される。
12／28　(金)	晴	遺物の原位置測量。
12／29　(土)	晴	遺物の取上げ、セクション図作成、機械の徹収、一部埋戻して道路作成。
12／30　(日)	晴	セクション図作成。
12／31　(月)	晴	



第1図　桝形遺跡とその周辺

2. 遺跡について

(1) 所在地及び立地

本遺跡は、群馬県勢多郡宮城村大字苗ケ島字桝形にある。(第1図)

群馬県のほぼ中央に鎮座する赤城山は、周囲に長い裾野を形成し、どこから登っても、だらだら坂を8里も登らなければならないと言うことから「赤城のばか8里」と諺言されるほどである。

この長い裾野には、山頂から四囲に幾拾幾百もの谷を開析して小河川をなし、それぞれ片品川、利根川、渡良瀬川へと流入している。

これらの谷に面した洪積世台地は、旧石器時代から連綿と我々の祖先が生活の舞台として来たところであり、無数と言ってよいほどの遺跡が点在あるいは重複して存在しているのである。(群馬県教委 1963年)

赤城山の名峯、荒山は赤城神社(宮城村三夜沢)付近で急斜面が終り、それより南は、緩い斜面となって長い裾野を引き、現在では宅地及び耕地、山林に利用されていて村民の生活の舞台である。

本遺跡は、この赤城山の南麓のほぼ中央にあって、荒山から伸びる山襞から南北に長く舌状に伸びる洪積世台地上にあり、遺跡のある台地東側には、やや深い谷が台地と並行し、西側には浅い谷が並行している。

現在、本遺跡の東側の谷は、農業用かんがい用水池になっているし、北側およそ100mの所に赤城南面道路が横走し、本遺跡の上に乗る村道と交差しており、さらにその北には、近年、桜の名所となった「宮城の千本桜」がある。

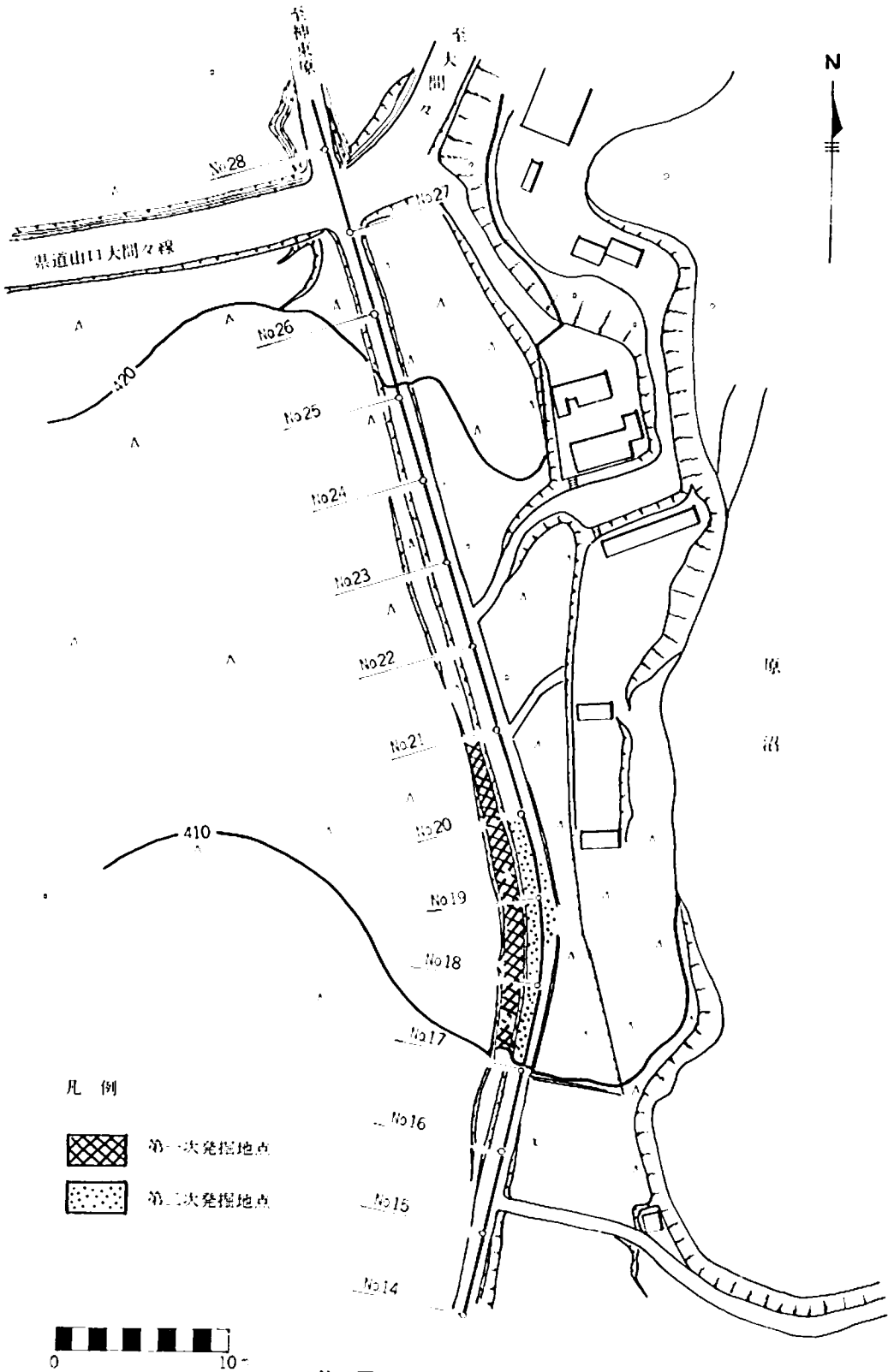
本遺跡の現況は、松林及び道路、駐車場となっており、標高は410mから420mの南向きの緩傾斜面上にある。

(2) 周辺の主要遺跡

本遺跡から桐生に至る赤城山東南麓は、相沢忠洋によって数多くの旧石器時代から縄文時代、さらに弥生時代等の遺跡が確認されている。

なかでも、とりわけ主要な岩宿遺跡は、本遺跡から直線で東南11km、夏井戸遺跡には東南東7km、武井遺跡には南東8km、大胡三ツ屋遺跡には南々西8kmである。

宮城村内における旧石器時代の遺跡は、本遺跡のほかに、市之関、柏倉、白山の三遺跡が知られており、削器、尖頭器、縦長剥片等の遺物が採集されている。


至神東原
至大間々
N
No28
No27
県道山口大間々線
No26
420
No25
No24
No23
No22
No21
No20
410
No19
No18
No17
No16
No15
No14
原
沼
凡 例
第一次発掘地点
第二次発掘地点
0
10

第2図 遺跡付近地形図

村内で熱心に遺物の収集をやってこられた故北爪道治氏の蔵品中に、本遺跡出土のものと思われる硬質頁岩製の細石刃用石核があり、さらに、前原豊氏も馬場字矢縄において尖頭器と有舌尖頭器を採集されており、今後、研究が進めば、もっと旧石器時代の遺跡が発見されることは確かである。

なお、宮城村誌の旧石器時代の記述及び掲載写真の中で、旧石器の遺物ではないかと紹介されている柏倉堀久保出土資料については、筆者は縄文時代の石器との確信を持っているが、本書においての詳細な言及は、本書の目的を逸脱することとなるので他日に譲ることとしたい。（海老原ほか　1980年）

3.　発掘区について

第一次発掘の既発掘地点は、村道二重橋～神東原線に並行する西側隣接部分であったため第二次発掘調査においては、第一次発掘調査の東隣接部分で、今回、村道改良工事の施行される地点のうち、村道改良工事の基点から自No17至No19の間の南北20ｍ、東西4.5ｍの村道直下を発掘地点として定めた。（第３図）

発掘地点は、完全発掘をすることとしたが、道路中央には、すでに水道管が貫通しておりローム層まで掘りかえされていたために、水道管埋設部分は発掘区から除外した。

発掘区のうち、水道管の西側に南から南北に５ｍの区割で１区、２区、３区、４区を設定した。

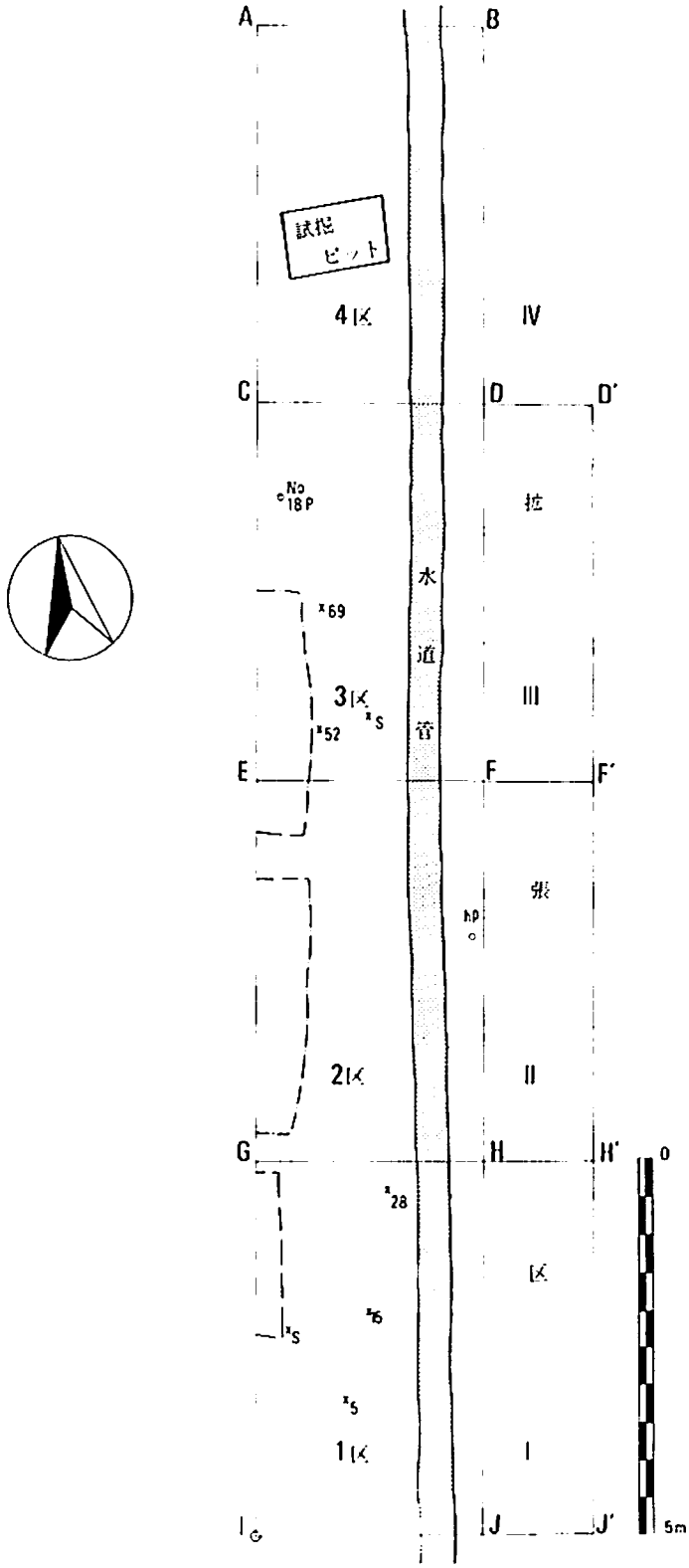
この区割の巾は３ｍとして設定したために、区割内に水道管が縦貫している。

さらに、水道管の東側に隣接して巾1.5ｍ、長さ５ｍを１区割とする拡張区を設けたが、拡張区Ⅰ区、Ⅱ区は通路直下のため発掘することが出来なかった。なお、Ⅳ区中央には1.3ｍ×１ｍの試掘溝を設けて、八崎軽石層まで発掘し、関東ローム層の堆積状況を確認した。なお、松林内に設定したＢトレンチは、小剥片３こが出土しただけなので記述を割愛した。

4.　層序について

本遺跡は村道直下にあったために、表土腐植土層の上半部を欠失しており、かわりにバラスが10cm程の厚さに敷込まれていた。

腐植土層の下半部は発掘区にほぼ均等に25cm程の堆積をしており、この下層には黄褐色ロー


A
B
試掘
ピット
4区
IV
C
D
D'
No
18P
拡
水
道
管
69
3区
S
52
III
E
F
F'
張
hp
2区
II
G
H
H'
0
28
区
16
S
5
1区
I
J
J'
5m

第3図　発掘区平面図

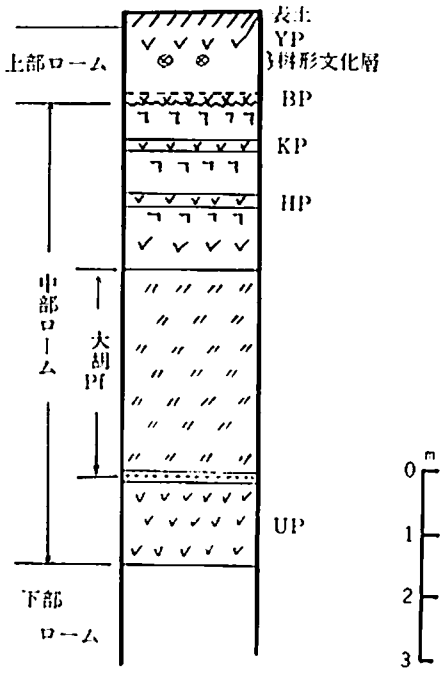
ム層があるが、腐植土層と黄褐色ローム層の中間にはソフトロームは介在していない。

黄褐色ローム層は、上部ローム層であり、この層はさらに細分される。

まず、腐植土層との境界から測って10cm下位に板鼻黄褐色軽石層（Y．P）があるが、まとまった堆積状態をせずに小さなパミスが網目状に散布しているにすぎない。パミスの下位は黄褐色ロームが80cmほど堆積しており本遺跡の遺物は、この層の上半部から出土したものである。

黄褐色ローム層の下位に板鼻褐色軽石層（B．P）がわずかながら堆積している。

これより下位は中部ローム層となるが、まず、褐色のローム層があり、さらにその下位に鹿沼軽石層（K．P）がわずかに堆積して再び褐色のローム層となる。この層の下位には八崎軽石層（H．P）が10cmほど堆積している。



第4図　樹形遺跡付近の層序

本遺跡では、主発掘区の北側に1.3m×1.0mのグリットを八崎軽石層まで掘り下げたが、ここは遺物の出土は皆無であった。

層位の詳細については現在検討中であるので、その成果は後日発表したいと考えている。

本遺跡の北方100mの標高440m地点における堆積状況は、関東ローム研究グループによって発表されており、本遺跡の発掘所見と大同小異であった。（第4図）

本遺跡の遺物の出土状況をみると、上部ローム層中の板鼻黄色軽石層（Y．P）直下から、最深のものの37cmの間に包含されていた。

このことは、本遺跡が板鼻黄色軽石の降下以前に形成されたことを物語っている。

5．　遺構及び遺物の出土状況について

(1)　遺　　構

本調査においては、住居跡と認定できる遺構や、貯蔵穴等の遺構の確認はできなかった。

しかし、発掘面積に比して相当数の細石刃用石核、剥片、削片、砕片等の出土があることや、ハンマーストーン等の工具も出土していることから、本遺跡は、石器の製作に関係する遺跡と考えられる。

この石器製作が屋外でなされたものか、屋内でなされたものかは現在のところ不明であるが、屋内で石器を製作し、又は、生活していたとしても、縄文時代の竪穴住居址のような遺構が確認されないことなどから、相当簡易な施設であったものと考えられる。

本遺跡の石器の出土分布をみると、発掘区の1区、2区、3区内から出土し、南北15m、東西4.5mの間は比較的平均して石器、剥片等が出土していて、偏った分布をしていない。

旧石器時代の遺跡に出土例の多い、ミルクストーンと言われる安山岩の自然礫は、本遺跡においても、多くの出土をみたが、他の遺跡に比してその出土状況を異にしている。

すなわち、群馬県武井内出東遺跡等の例では、拳大から両手を拡げた程度の大きさの安山岩の自然礫が数10個まとまって出土しているのに比して、本遺跡においては、50個の出土例ともすべて単独で出土しているのである。

これらの礫は、調理用具であったと言われている。この礫の使用方法として、礫を火で焼いて、①この礫に調理しようとする食物を直接あてて食物を焼く、②竹皮等に包んだ食物を多数の礫の間に入れて蒸焼きにする、③木の器等に水と食物を入れ、さらに、礫を投入して水を沸騰させることによって、食物を調理するなどが考えられている。

このことを裏づけるかのように、本遺跡の出土の礫の大部分は火熱を受けたものである。

(2) 火 の 使 用

出土した木炭は、非常に細小であったために、資料として採集できたものは2片にすぎないし、炉として確認できる遺構は発見できなかったが、先にも述べたように、大小の多数の火熱を受けた安山岩礫が出土しており、樹形遺跡を遺した人々は、火を日常使用していたものと考えられる。

本遺跡の木炭の出土状況は、石器、剥片、自然礫等の遺物に混って、黄褐色ローム層の上半部から多数出土している。

(3) 石器の出土状況

発掘区は、比較的平均した石器の出土分布をしめしており、偏りが認められないことから、発掘区が一つのブロックとして、は握できるものかも知れない。

発掘区の中央部分は、既に水道本管の埋設工事のために破壊されており、未確認ではあるが、この部分にも遺跡は広がっていたものと推定できる。さらに、第一次調査の一部にも広がっていたものと思われる。

発掘区の北側と南側の遺物の出土状況をみると、まず、発掘区の北側（村道の基点No18より

北側）に拡張区を設けて発掘してみたが、全く遺物は無かった。

さらに、発掘区の南側（村道基点No17より南側）に拡張区を設けたが、ここでは、剥片が3点出土しただけである。

このことから、樹形遺跡の主体部は、村道基点No17からNo18のわずか南北に15ｍの間にあり、東西の広がりは未発掘の部分が多いために未確認ではあるが、遺跡の乗っている台地そのものの巾が20ｍほどの狭い舌状台地であることから、大きな遺跡とは言いがたいのである。

今回の発掘調査における石器の出土状況で特筆すべきことは、資料No126のチョッピングトールと大型剥片の出土状況で、東の拡長区から、チョッピングトールの刃部を真上にして大型剥片と一緒に出土（図版３参照）したものである。

このような出土例には、長野県馬場平遺跡（芹沢　1955年）がある。

馬場平例では、刃部を真上にした玄武岩製の大型礫器（チョッパーなのか、チョッピングトールなのか不明で、報告者は単に礫器としている。）とその付近に12個の自然礫及び若干の剥片が発見されているが、本遺跡では、自然礫を一緒に出土していない点を異にしている。

馬場平の報告者が指摘するように、直立した礫器（本遺跡ではチョッピングトール）は骨又は木を敲き割る際のアンビルとして据え置いたもので、この礫器の刃部に切断しようとする骨又は木を乗せ、別のハンマーストーンによる打撃を加えることによって、その目的をはたしたものと思われる。

6.　出土遺物について

(1)　出土遺物の概要

本遺跡において採集できた遺物には、細石刃、細石刃用石核、舟底形石器、削器、掻器、彫器、石刃、ハンマーストーン、磨石、チョッピングトール、チョッパー、小型石核、剥片（縦長剥片を含む）、スキー状スポール、砕片、自然礫のほかに微細な木炭片がある。

遺物の出土総数381点の器種別は第１表のとおりであるが、石器製作のための素材となったり、石器製作中の調整剥離等の過程で生ずる剥片が183点もあり、全遺物に占める割合は48％である。

この183点の剥片中には、縁辺に細部加工のあるものもあり、刃器と同様に使用していたものもあると思われる。

また、剥片については、接合するものもあると思われるが、現在、整理検討中であるので、後日接合資料の問題について、石器製作技術の問題として報告したいと思っている。

次に出土の多いものは、火熱を受けた大小の安山岩製の自然礫で50点出土しており、全遺物

に占める比率は13.1%である。

本遺跡の文化的特徴を示す資料である細石刃は39点あり、3番目に多く、全遺物に占める割合は10.2%であり、この細石刃を製作した細石刃用石核は12点出土している。

また、第一次調査以来、桝形遺跡といえば舟底形石器を出土する遺跡として知られているが、今回の調査でも表採の1点を含めて、5点の出土があった。

総数379点の石器類の石質を検討してみると、頁岩が250点もあって、全体の65.9%と圧倒的に多い。

石器や剥片の一部に転礫の表皮がそのまま残っているものもあり、原石は河川から採集したことをうかがい知ることができる。

本遺跡で多用されている頁岩は、近くの小河川や谷からは発見できないから、渡良瀬川や利根川の川原で採集して搬入したものと思われる。

次に安山岩が52点あり、このうちの50点は自然礫であって、軟質の安山岩で、赤城山麓の谷や河川で一般的に採集できる「赤城のばか石」と言われる安山岩である。他の2点は石器であるが、サヌカイトに近い安山岩で硬質のもので製作されている。

その次に多いのが、硬質頁岩で40点の出土があり、全遺物に占める比率は10.2%である。

硬質頁岩は、新潟県から東北地方に多い岩石で、同地方の遺跡から出土する石器の大半が見事な硬質頁岩で製作されている反面、関東地方から中部地方で多用されている黒曜石はあまり使用されていない。

群馬県下において硬質頁岩を産する場所は上越国境の三国山や大峯山で筆者は登山中に採集したことがあるが、他の地方にあるのは知らない。

また、利根郡下の縄文時代の遺跡から出土する石器には、相当数の硬質頁岩製のものがあり、群馬県下の他の地方と石器製作時の石材の選択に異なりがあるようである。

舟底形石器を石器組成に持つ遺跡を遺した人々は、硬質頁岩を石器製作にあたって好んで使用した節がある。

新潟県荒屋遺跡（芹沢　1959年）では舟底形石器、細石刃、荒屋型彫器、削器、掻器等を石器組成に持つことで著名であるが、遺物の大半は硬質頁岩製で若干の頁岩等を含んでいる。荒屋遺跡は、硬質頁岩を多量に産する地方と言うことから、硬質頁岩を多用することを首肯できるが、茨城県後野遺跡（川崎外　1976年）や本遺跡のように硬質頁岩の産地から相当遠距離にある遺跡において、硬質頁岩を使用しているのは、どのような理由によるのであろうか。

本遺跡を遺した人々も、舟底形石器文化の先進地で使用されている石材を移入したものであろうか。

硅岩も比較的多く、23点の出土があり、これらの硅岩は、古生層の足尾山地に水源を持つ渡良瀬川の川原で採集して、本遺跡に搬入して石器を製作したものと思われる。

なお、本遺跡においては黒曜石製のものは全く出土しておらず、群馬県下の桝形遺跡の前後

に編年される文化であるナイフ形石器文化や尖頭器文化、さらには縄文時代の石器に相当数の黒曜石を使用しているのとは好対照である。

第1表　桝形遺跡の石器組成及び石質区分表

石器組成			石質区分		
器種	数量	比率	石質	数量	比率
石刃	7	1.9%	頁岩	250	65.9%
細石刃	39	10.2	安山岩	52	13.7
細石刃用石核	12	3.0	硬質頁岩	40	10.2
削器	15	3.9	硅岩	33	9.2
掻器	2	0.5	砂岩	2	0.5
舟底形石器	5	1.3	不明	2	0.5
彫器	1	0.3			
ハンマーストーン	5	1.3			
磨石	1	0.3			
チョッピングトール	1	0.3			
チョッパー	2	0.5			
小型石核	6	1.5			
スキー状スポール	5	1.3			
剥片	183	48.3			
縦長剥片	8	2.1			
砕片	37	9.7			
自然礫	50	13.6			
合計	379	100.0	合計	379	100.0

(注)　このほかに木炭破片が2個ある。

(2)　主要出土遺物

細石刃（図版5、第5図）

細石刃は、総数39点の出土があり、本遺跡における石器としては最大の出土数である。

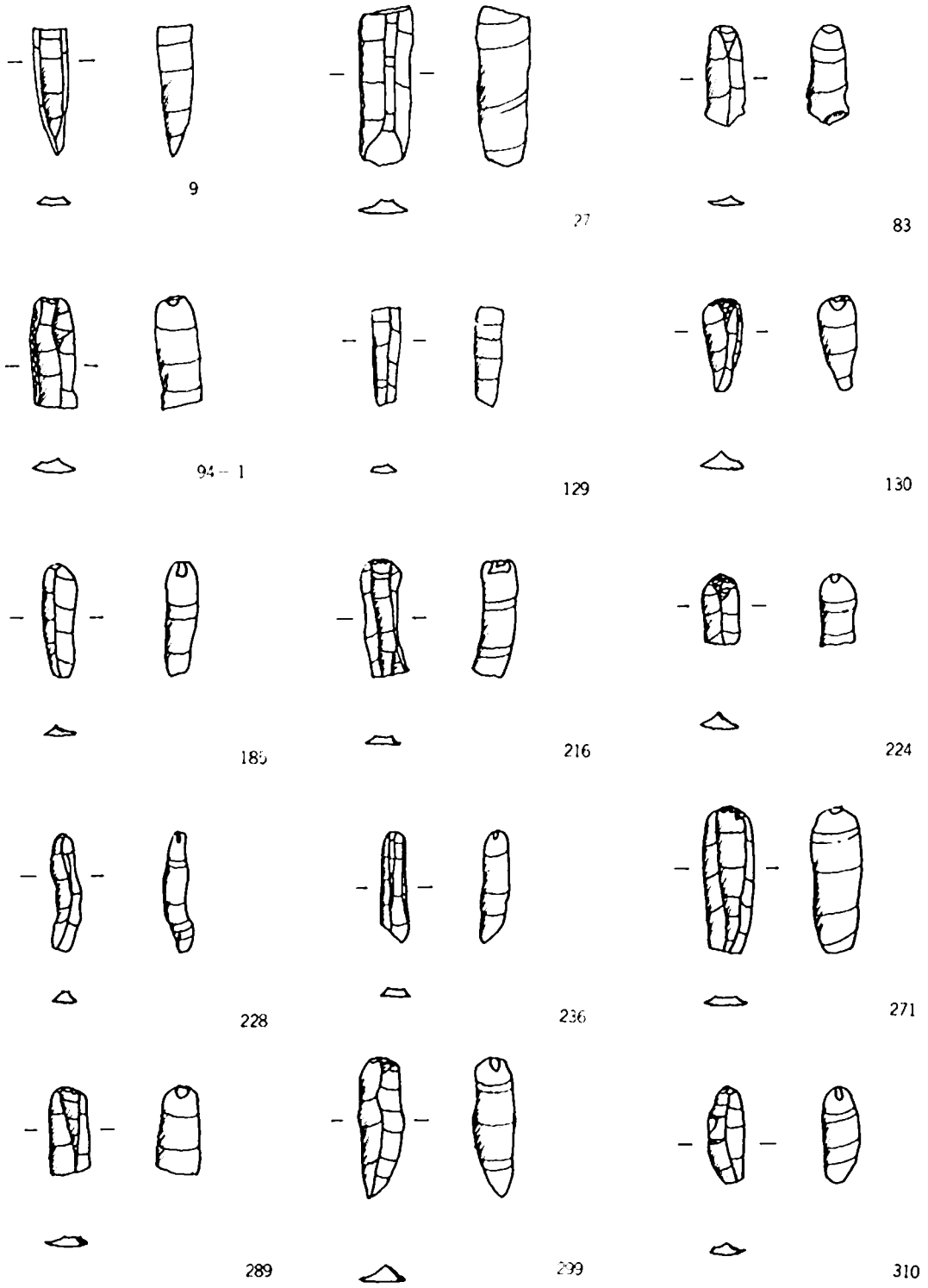
石器の石質は、硅岩、硬質頁岩、頁岩の3種類で、出土した細石刃用石核の石質も同様のものを使用している。

大きさは長いもので23mm（№27）であるが、ほとんどのものが細石刃用石核から剥離された細石刃を2～3個に分割しているようで、打瘤部から先端部まで完全に残っているものは少ない。

このことから、細石刃を2～3個に分割してから、木や骨などに彫られた溝に埋め込んで槍や銛の刃部として使用したとの説があるが、使用中の破損等も考えられるので断定できない。

№9：外縁に近い左右にそれぞれ1本の稜があり、先端部近くで接している。打瘤部は切断されていて欠損している。長さ19mm、巾5mm、厚さ1mm、頁岩製。

№27：　長さ、巾とも本遺跡出土の細石刃の中では最大で、中央に2本の稜が通り、現存の



S 1 : 1

第5図　桝形遺跡出土の細石刃

長さは23mm、巾8mm、厚さ2mmである。打瘤部は切断されていて欠損しているが、背面左縁辺には細部加工がなされている。硬質頁岩製。

№94－1：　主要剥離面には打瘤部を残しているが、先端部は欠損している。背面には2本の稜が通り、左縁辺に細部加工がされている。硅岩製で現存の長さ16mm、巾6.5mm、厚さ1mm。

№129：　基部及び先端部を欠損した細石刃の中間部であり、現存の長さ14mm、巾4mm、厚さ1mm、硬質頁岩製である。

№216：　中央に2本の稜が並行し、先端部を欠くもので、主要剥離面には打瘤を残しており、細石刃はやや左に曲った形をとっている。現存の長さ17mm、巾6mm、厚さ1mm、硅岩製。

№228：　先端部はややねじれていて、他の細石刃と趣を異にする。主要剥離面に打瘤を残し、長さ18mm、巾4mm、厚さ2mmで硅岩製。

№271：　わずかに先端部を欠損してはいるものの、美しい形態をしたやや巾広な細石刃で、背面中央に2本の稜が通り先端部で交わっている。現存の長さ22mm、巾8mm、厚さ1.5mmで頁岩製。

№299：　完形の細石刃で、背面中央に1本の稜が通り、主要剥離面に打瘤を残し、器形はやや反っている。長さ22mm、巾7mm、厚さ2mmで硬質頁岩製。

細石刃用石核（図版6、7　第6、7図）

本遺跡からは12個の出土があり、石質は硅岩、硬質頁岩、頁岩の3種類で、出土した細石刃の石質と一致する。

これらの細石刃用石核には、細石刃を剥離した時、及び細石刃を剥離するために調整剥離した樋状の剥離痕のあるものとないものの両方がある。前者は細石刃を作出途上か、すでに作出を完了した石核であり、後者は、これから細石刃を作出しようとする素材としての石核としては捉できる。

本遺跡出土の細石刃用石核は、製作工程を異にする5種類があるので、これを便宜上Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類、Ⅳ類、Ⅴ類として区分した。

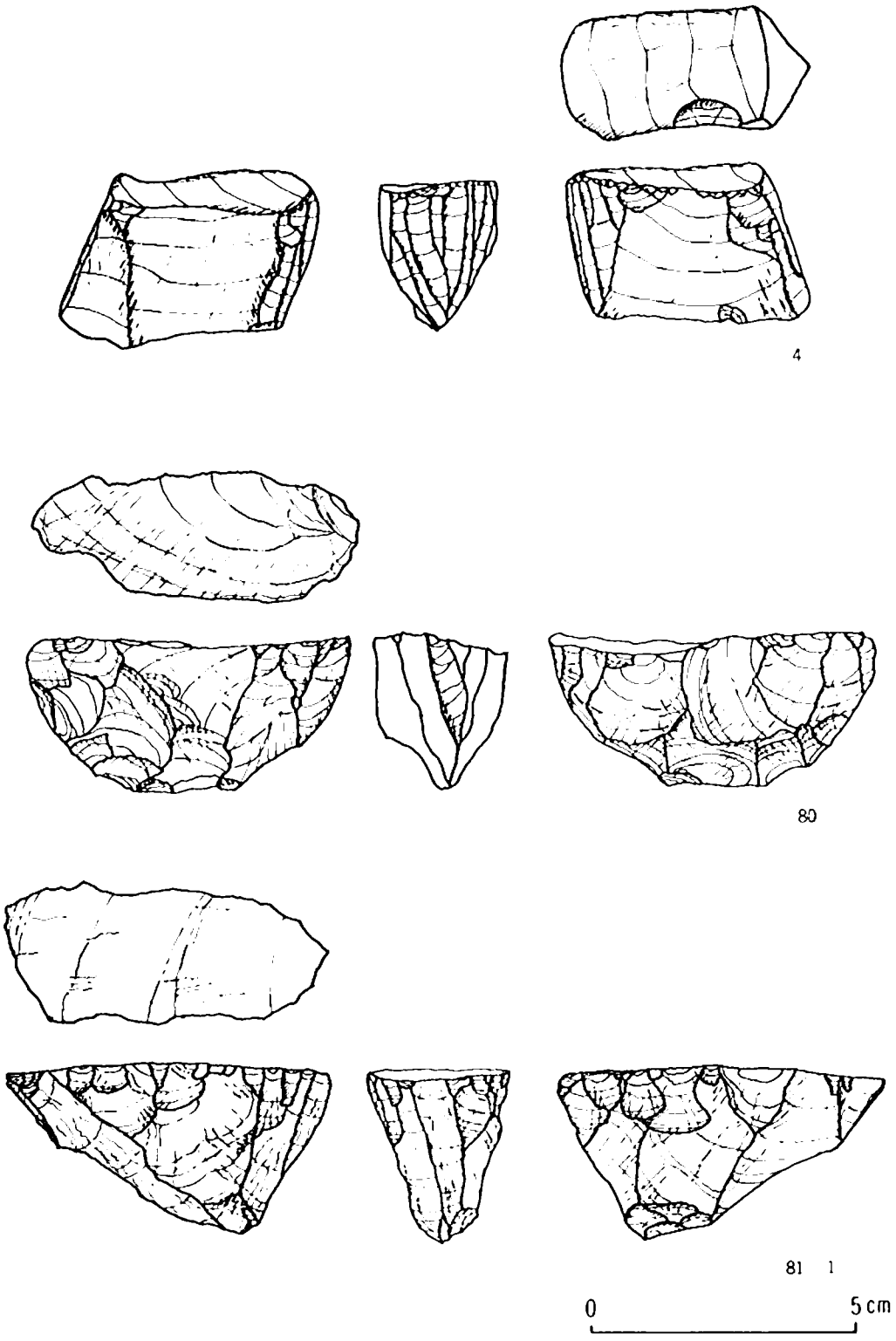
〔Ⅰ類〕

両面調整素材を使用しているもので、湧別技法類似の製作手法によるものである。

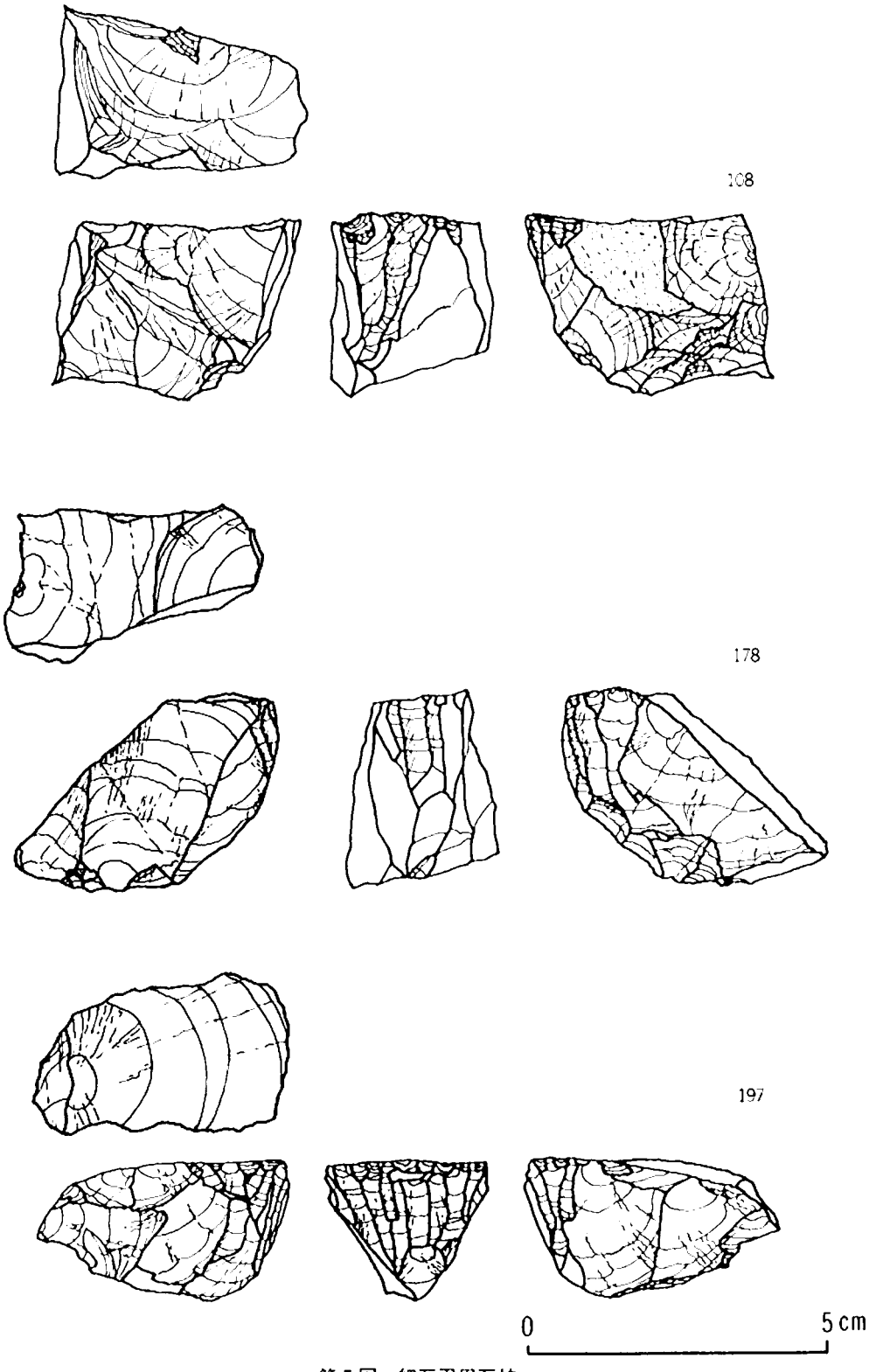
№80：　両面調整した分厚い尖頭器状の素材を用いて、上半部を数回の剥離によって平坦部（甲板面）を作出している。その後に平坦打面から調整のための剥離を若干加えて舟形に成形している。平坦打面（「甲板」にあたる部分で以下「平坦打面」という。）の一方の末端に1条の樋状剥離痕を残している。高さ28mm、平坦打面の長さ62mm、巾24mmで頁岩製である。火熱を受けてハネが若干認められる。

なお、本資料は白滝型石核のように平坦打面には磨耗痕を有していない。

〔Ⅱ類〕



第6図　細石刃用石核



第7図　細石刃用石核

母岩あるいは剥片のもつ平坦な剥離面をそのまま平坦打面として、この平坦打面や反対側から剥離を行って舟形に仕上げられた石核である。

No81－1： 大きな平坦面を有する母岩あるいは剥片の平坦面の両側面に入念に調整を加えて舟形に仕上げられた石核である。平坦打面の末端に1条の樋状剥離が認められる。高さ33mm、平坦打面の長さ61mm、巾24mmで頁岩製である。

No160： 平坦打面からの側面調整によって舟形に仕上げられている。樋状剥離痕は認められず、素材と考えられる。平坦打面の長さ34mm、巾25mmで高さは32mmと烏帽子型に近い。硅岩製である。

No4： 大きな平坦面を有する素材に両側面から数回の剥離を加えて舟形に仕上げられているが、両側面の剥離痕が大きく他の細石刃用石核と趣きを異にしている。平坦打面の一方の末端に7条の樋状の剥離痕を残している。高さ27mm、平坦打面の長さ39mm、巾23mmで頁岩製である。（図版6の左上の資料。）

なお、II類として区分できるものに、No181の頁岩製のものがあるが、この資料も樋状の剥離痕はない。

〔III類〕

角礫状の素材を用いているが、II類と同様に平坦打面を新たに作出する方法をとらずに、素材の平坦面を利用している。II類との相違点は、II類は平坦面あるいは反対側から調整して舟形に仕上げられているのに対してIII類としたものは、平坦面の反対側から若干調整を加えただけのために、はっきりした舟形には仕上げられていないものである。このために自然礫面をそのまま残しているものもある。

No108： 硅岩の角礫状の素材を用い、角礫の平坦面をそのまま平坦打面にし、両側面の細部調整は、わずかに平坦面の反対側に行われているだけで側面の一部分に自然礫面を残している。平坦打面の末端に3条の樋状剥離痕を残している。高さ38mm、平坦打面の長さ35mm、巾20mmである。本資料は、資料No178と同一の母岩から剥離されたものを使用しているようである。

No178： 硅岩の角礫状の素材を用い、No108と同様に粗い調整剥離を加えただけで平坦打面も素材の平坦面をそのまま利用している。平坦打面の一方の末端に4条の樋状剥離痕を残している。No108と同一の母岩から得られた角礫状の剥片を使用しているものと思われる。高さ29mm、平坦打面の長さ11mm、巾10mm。

〔IV類〕

縦長剥片を素材に用いたもので、縦長剥片の主要剥離面を平坦打面としているもので、細石刃は、縦長剥片の末端から剥離されているのが特徴である。

No128： 頁岩製の先端部の分厚い縦長剥片を素材に用い、プラットホーム及び主要剥離面のバルブをそのまま残している。この主要剥離面から両側面に調整を加えて舟形に仕上げたうえで、細石刃を剥離しており平坦面の先端部に5条の樋状剥離痕を残している。本資料について

は、現在、接合資料の有無等を検討中である。

No197：　頁岩の分厚い縦長剥片を素材に用い、プラットホーム及び主要剥離面のバルブをそのまま残している。主要剥離面を平坦打面として、両側面に調整を加えて舟形に仕上げてあり、平坦打面の先端に７条の樋状剥離痕を残している。高さ23㎜、平坦打面の長さ42㎜、巾27㎜。本資料の平坦打面は磨かれて光沢がある。

〔Ｖ類〕

片面調整の素材を用いて、平坦打面は片面調整後に一方の末端から剥離を加えて作出し、更にこの平坦面から細石刃を剥離したものである。

No349：　一面に自然礫面を有する剥片を用い、自然面を一部分残して断面がややＤ字形の片面調整の素材にしてから、片面調整の一方に平坦打面を作出して、そこから細石刃を剥離している。樋状剥離痕を２条残している。高さ45㎜、平坦打面の長さ46㎜、巾29㎜で頁岩製。表面採集資料である。（図版６の中央の資料である。）

舟底形石器（第８図）

本遺跡からは、今回の発掘調査で５点出土しており、第一次調査の際に14点の出土があるので合計19点の出土があったことになる。

舟底形石器については、甲板面（平坦面）に摩耗痕等があることなどから一種の物を削るスクレイパーとして分類されてきたのであるが、先に述べた舟底形の細石刃用石核に形態が非常に類似している。

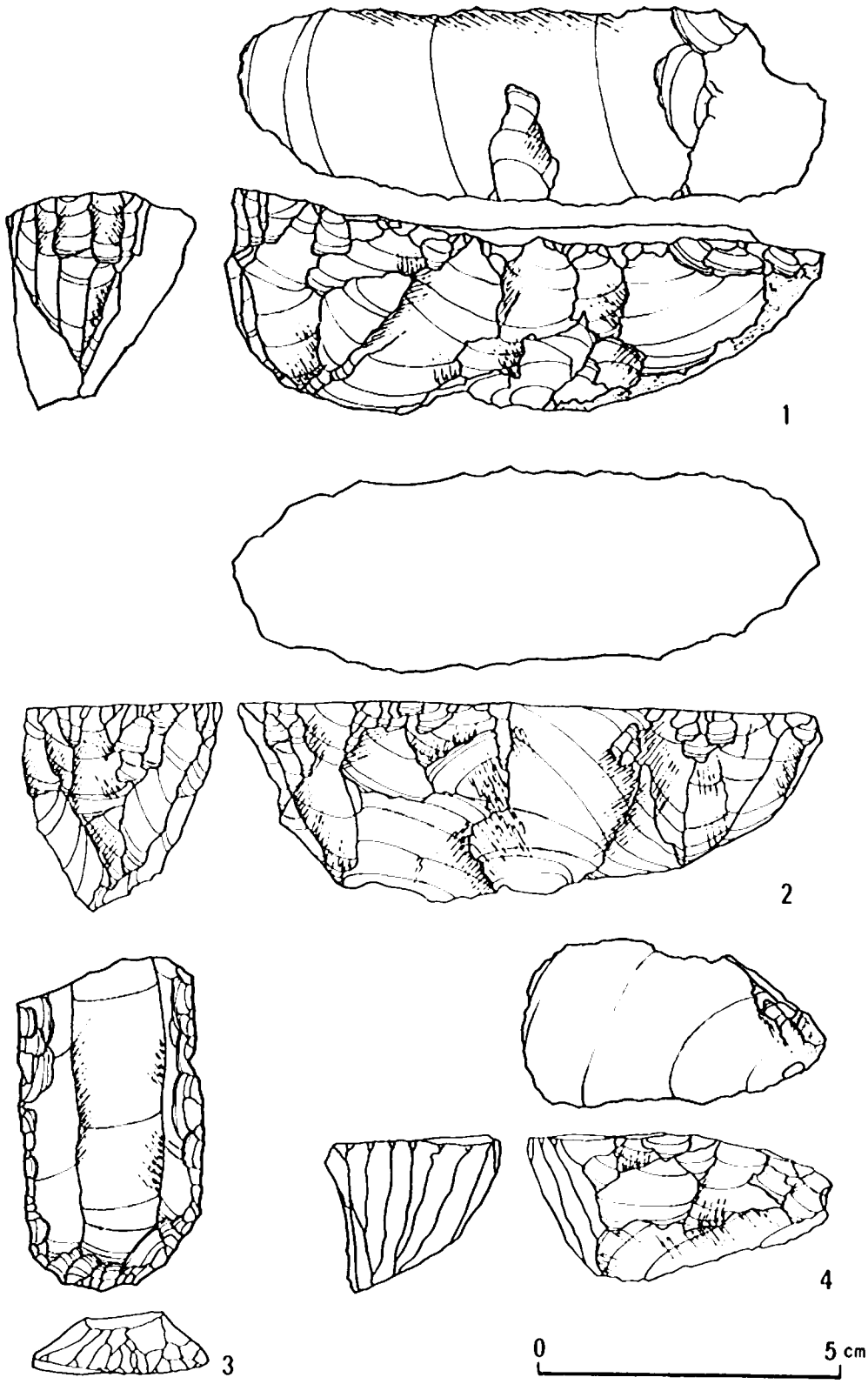
甲板面が大きく、摩耗痕のあるもの等の本遺跡の第一次調査出土資料で舟底形石器と分類して来たものに類似するものを細石刃用石核と区分した。これらの資料を観察したかぎりでは、①甲板面が巾広く平坦に作出され、細石刃用石核とは趣を異にする一定の型を持っていること。②甲板面に使用により生じたと思われる磨耗痕があるものがある。③側縁に入念な加工が加えられている等からスクレイパーの機能を有しているものと思われるが、舟底形石器としたものの中にも、甲板面の一末端から数条の樋状剥離を行っているものもあり、細石刃用石核でないと断言はできないものもある。なお、東北大学の芹沢長介先生の最近の研究によれば、舟底形石器の摩耗痕は鹿の角によって生じたものとのことで詳細についての発表が待たれるところである。

現在、第一次、第二次調査出土の19点の舟底形石器について、分類、製作技術、他遺跡との関連、用途等を検討中であり、発表の段階でないので詳細は後日に譲りたい。

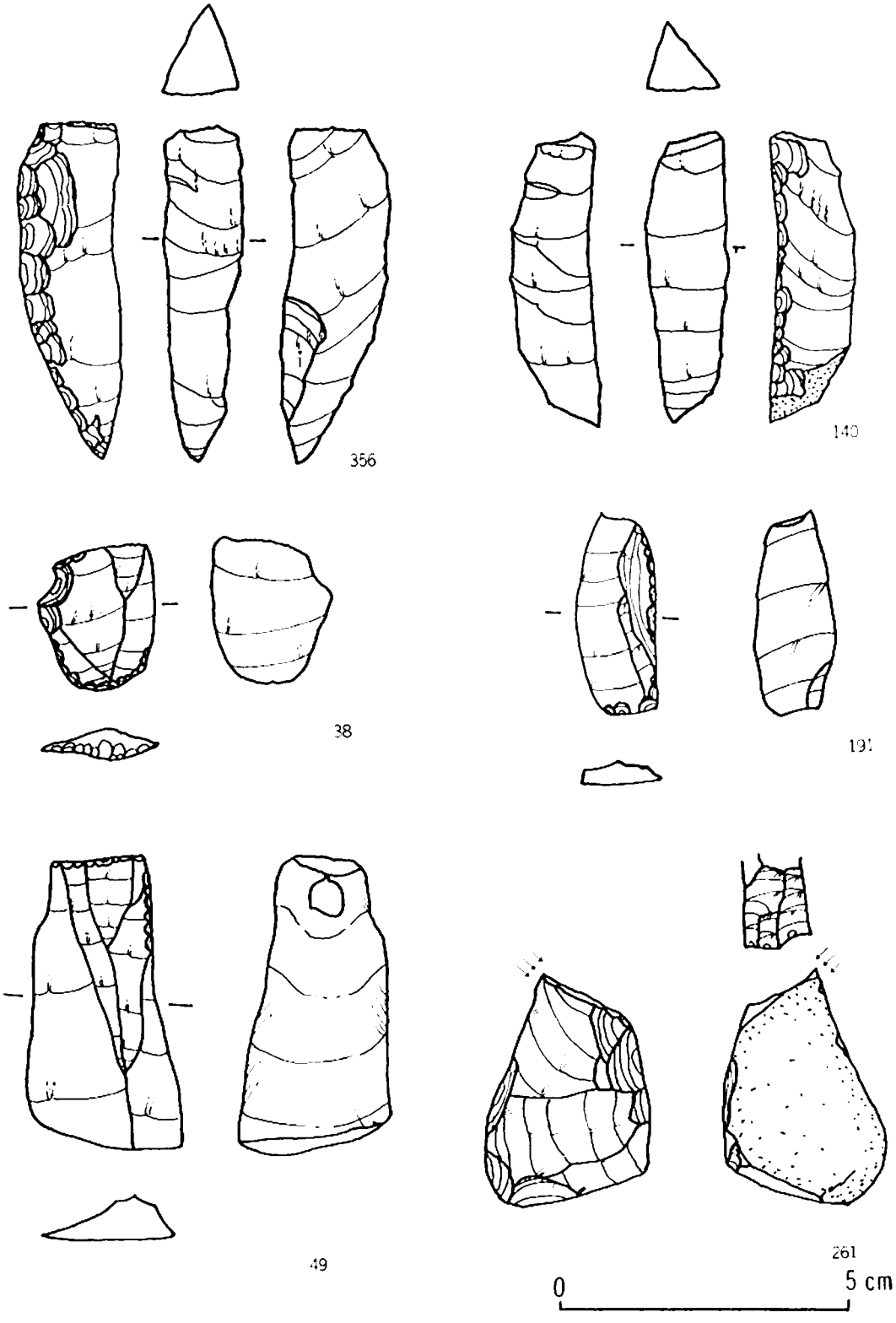
最も典型的な資料を参考のために掲示したのが第８図の実測図である。

スキー状スポール（図版８、第９図）

出土総数は５点で出土数は少ないが、本遺跡に湧別技法のあったことをしめす重要な資料で



第8図　舟底形石器、掻器（第一次発掘資料）



第9図　スキー状スポール、掻器、削器、石刃、彫器

ある。

本遺跡出土のスキー状スポールは、いずれも断面三角形を呈するファーストスポールで断面四角形のものは未発見である。

しかし、本遺跡出土の1類とした細石刃用石核の平坦打面に比してスキー状スポールの平坦面は狭くて、接合するものが皆無であることから、断面四角形のセカンドスポールないしサードスポールは未発見ながら存在するものと考えられる。

No140：　尖頭器状の両面調整素材の一方の尖頭部を切断してから、舟底形石器又は舟底形の細石刃用石核を作出するために剥離された削片である。頁岩製で高さ16㎜、平坦面の長さ50㎜、巾14㎜。

No356：　表面採集資料であるが、No140と同様の技法で作出されている。頁岩製で高さ18㎜、平坦面の長さ57㎜、巾13㎜。

以上の二点の資料のほかにも同様のものがあるが、いずれも一方を切断していて白滝型のスキー状スポールとは異なっている。

掻　　器（図版8　第8、9図）

動物の皮剥ぎ用の工具といわれる掻器は、狩猟がさかんであったことを物語る資料である。

今回の調査において、小型の拇指型のもの1個と縦長剥片を素材とする中型のもの1個の合計2点が出土した。

No38：　小型のいわゆる拇指型に属するもので、主要剥離面のバルブ面は切断されている。背面には両側縁に細部加工を施してあり、先端部を刃部としている。長さ23㎜、巾18㎜、厚さ5㎜で硬質頁岩製である。

No119：　中型の縦長剥片を素材に用い主要剥離面のバルブを残している見事な資料である。背面の両側縁に細部加工を加え、先端部に刃部を付している。

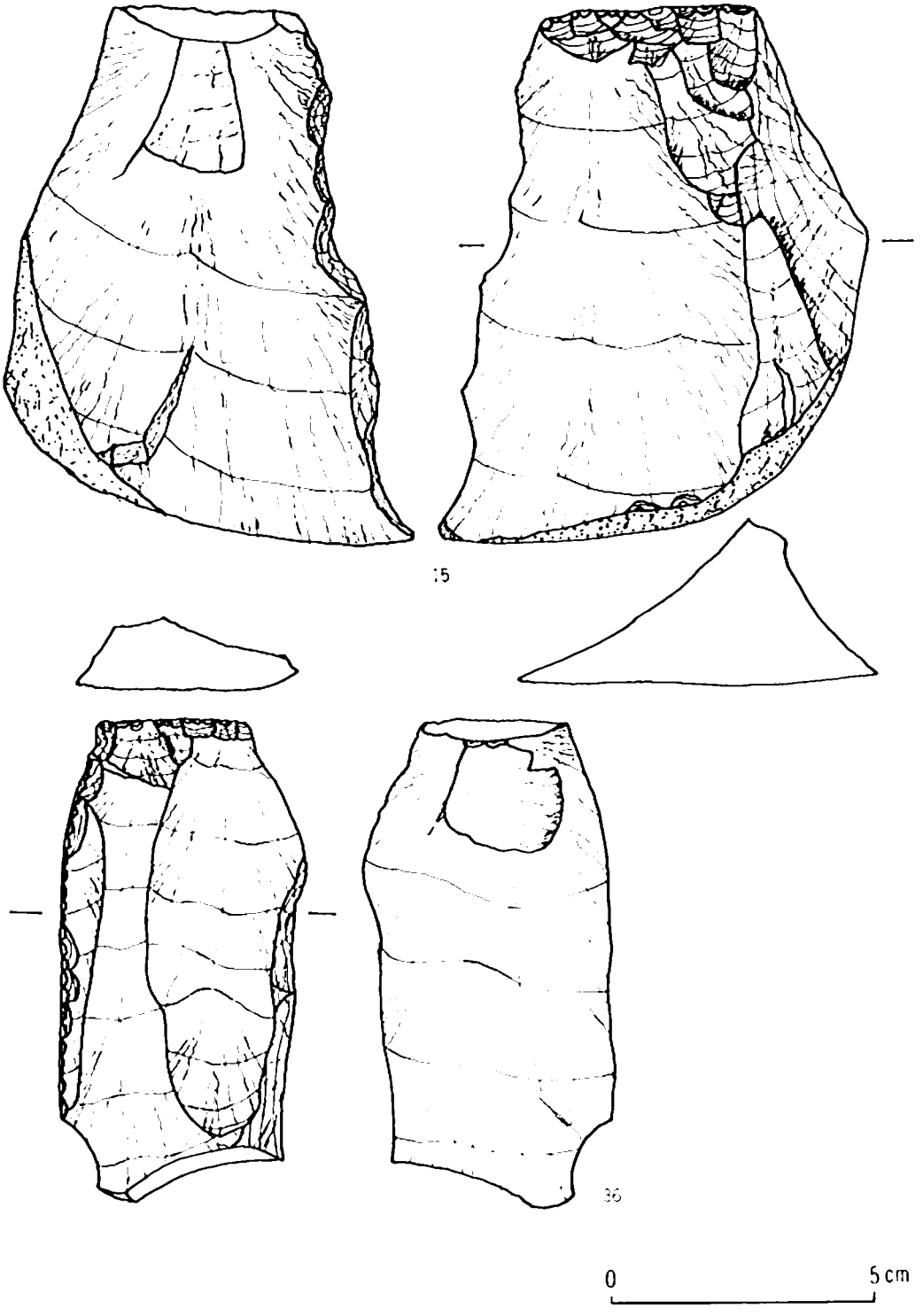
なお、この資料と同一形態のものは、第一次発掘でも8点（第8図3参照）の出土があるが、No38のように小型のものは今回が初めてである。

削　　器（図版7、8、10　第9、10、11、12図）

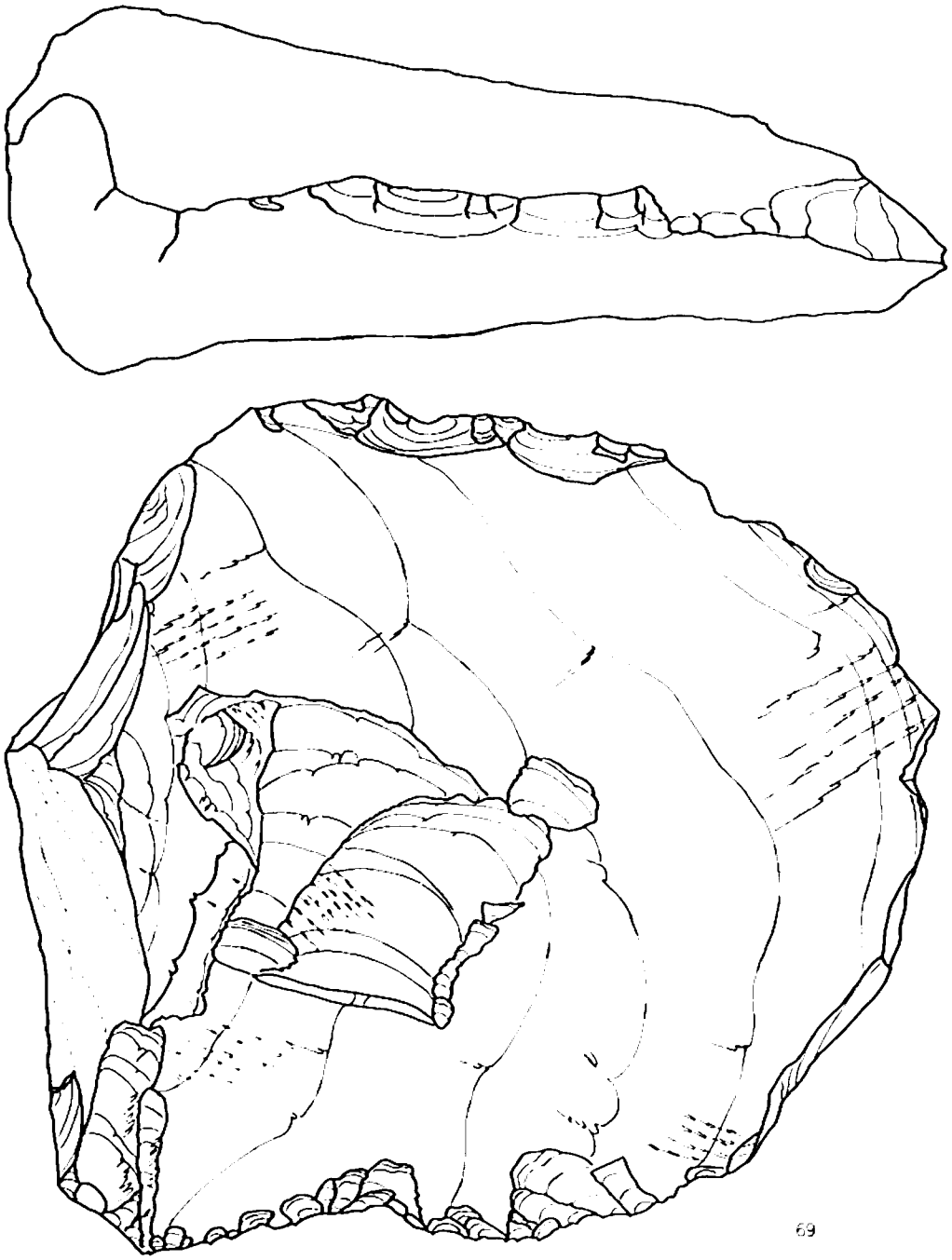
骨、角、木等の加工の際に削るための工具と考えられる削器は、大型のもの、中形のもの、小型のもの、あるいは刃部が側面全体にあるものや一部にしかないもの等の種々の形態があり、本遺跡からの出土数は15点である。

No15：　大型の剥片を素材に用いて、一側縁に細部調整を加えて刃部を形成している。長さ110㎜、巾68㎜、厚さ34㎜、安山岩製である。

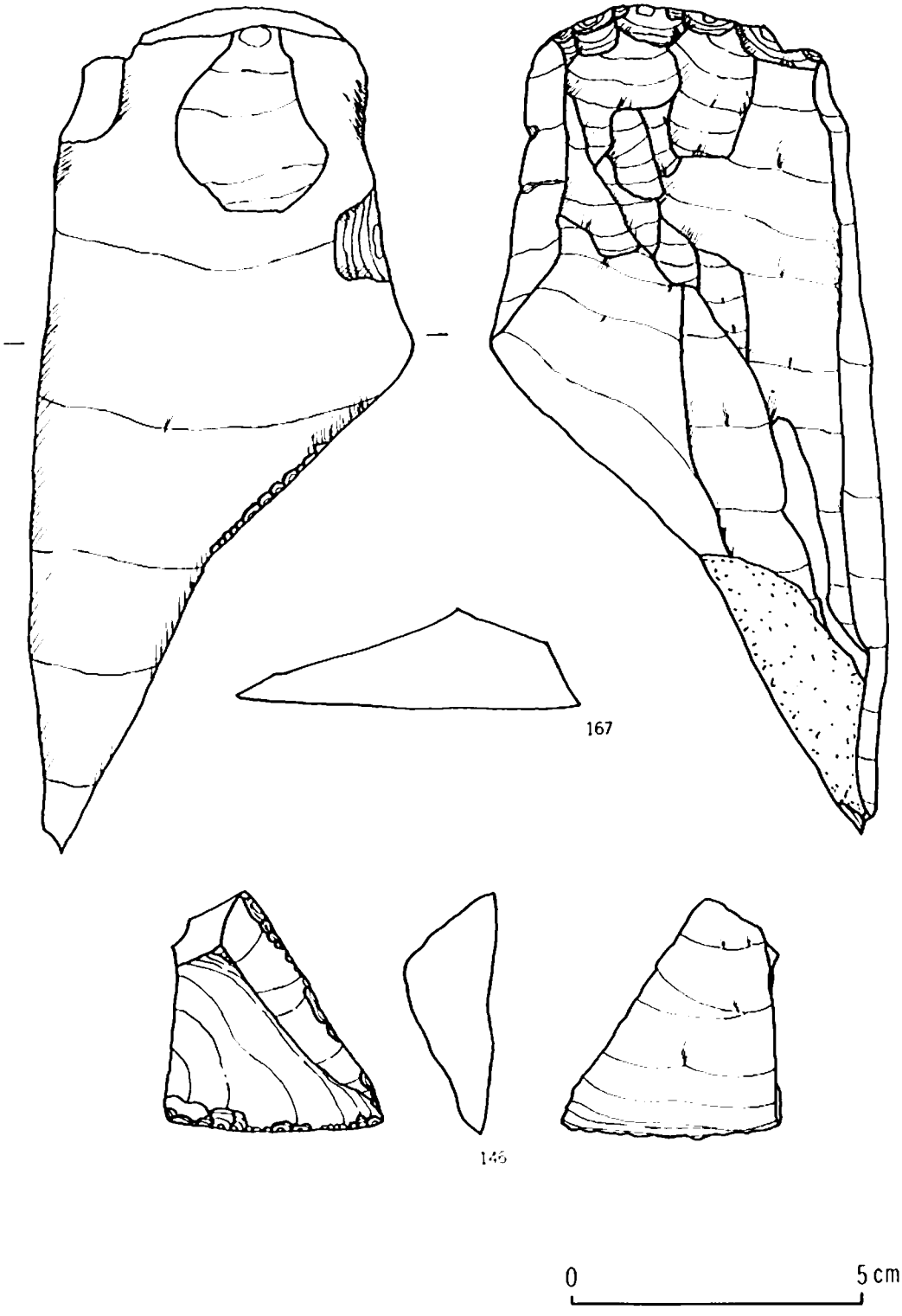
No36：　頁岩製の縦長剥片を素材として一側縁に細部加工を施して刃部を形成している。主要剥離面には大きなバルブを有し、背面には3本の稜が通っている。長さ83㎜、巾46㎜、厚さ



第10図　削　　器



第11図　大　型　削　器



第12図　削　　器

14㎜、剥離角110°

№69：　頁岩の大型の剥片を素材に両縁辺に細部加工を施して刃部としている。細部加工は両面から行われている。

片側の面は⅔ほど自然礫面を残し、⅓ほどは節理による剥がれがある。反対側の面には大きな打瘤と打瘤裂痕を残し、このような大きい剥片を剥離する際に相当強い撃打を与えて剥離したことを物語っている。

長さ150㎜、巾132㎜、厚さ57㎜で重量も1010ｇあり、本遺跡出土石器中でも大きなものの一つである。

№191：　硬質頁岩製で横長剥片を素材として用い、一側縁に細部加工を行って刃部を形成している。反対側縁は主要剥離面からの１回の剥離によって切断されて細身のスマートな形に作られている。主要剥離面のバルブ面は切断されて欠損している。長さ36㎜、巾14㎜、厚さ3.5㎜の小型のものである。

彫　　器（図版８、第９図）

本遺跡出土の彫器は非常に少なくて、わずかに１点のみである。

第一次調査でも１点確認されているだけで本遺跡における彫器のあり方が問題となる。

細石刃文化においては、石器組成の中に彫器を必ず持っている。なぜなら、彫器は木や骨、又は角に溝をうがつ工具で、ノミとしての役目を持っており、作出された細石刃を骨等の溝に植え込んで、槍とか銛といった道具を製作するためになくてはならないものである。№261は、赤色の硅岩の角礫を素材にして先端部位に３条の樋状剥離を加えて彫刻刃面を作出している。長さ40㎜、巾27㎜、厚さ15㎜で小型のものである。

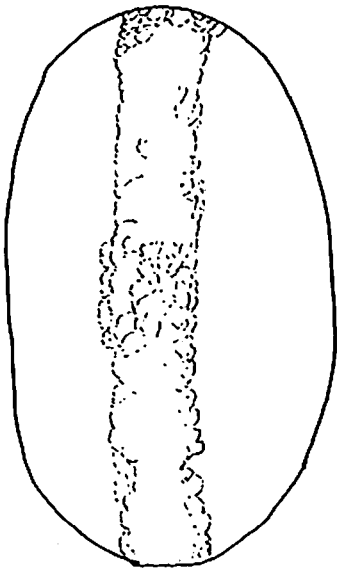
なお、他の舟底形石器を出す遺跡においては、多量の彫器を伴うのが一般的である。たとえば、新潟県荒屋遺跡（前出）では、湧別技法によると考えられる舟底形石器に荒屋形彫器を多量に伴出して彫器の製造跡ではないかと考えられている。荒屋遺跡に関係の深いと思われる北海道の各遺跡でも同様で、ホロカ沢Ⅰ遺跡（白滝団体研究会　1963年）では、湧別技法によらない舟底形石器（ホロカ型石器）にホロカ型彫器を伴出しているし、ホロカ沢Ⅱ遺跡（同　1963年）ではオショロッコ型彫器を相当数伴出している。

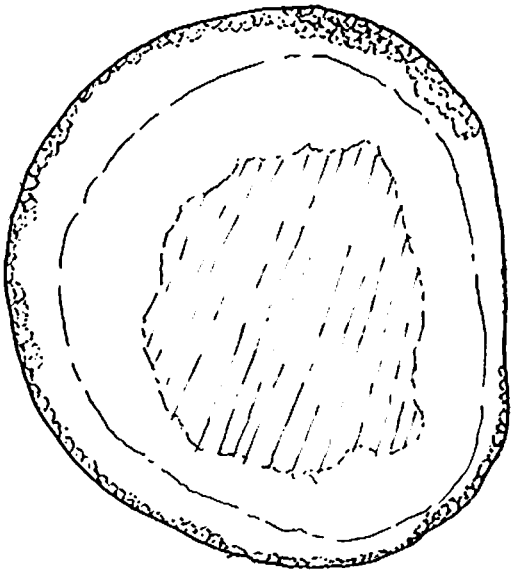
本遺跡の彫器は、以上の彫器のどの型式にも含まれないものであるうえに、その出土数も微量で今後の研究を重ねる必要があるテーマの一つである。

ハンマーストーン（図版12、第13図）

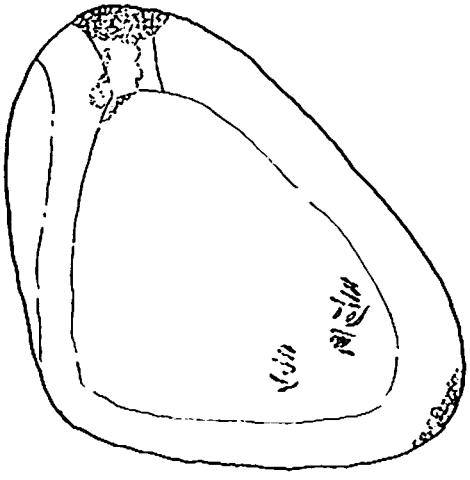
石器製作又は骨角器等の製作の際の敲打用の工具として使用されたもので、たいがいのものは手に握れる大きさの楕円形や長円形の自然礫を、加工を加えずに使用している。

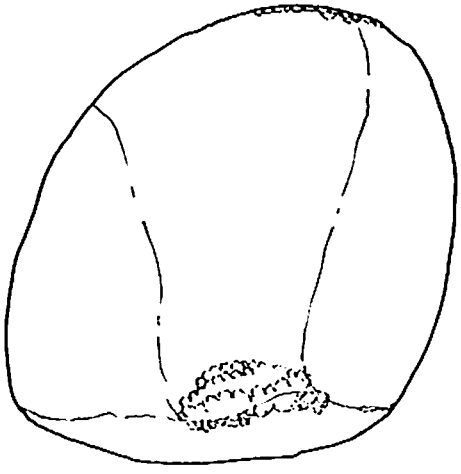
礫の長軸の両先端に敲打の際に生じた細かい裂痕を多数残していて、ひんぱんに使用してい





28－2





28－1

0　　5 cm

第13図　ハンマーストーン

たことがわかるのである。

資料№28－1と同28－2は同一の地点から一緒に出土したもので、前者は頁岩製で398gあり、後者は硬砂岩製で425gあり、手に握るのに丁度よい自然礫を用いている。なお、№28－2の平坦面の一方には磨石のように磨かれており、磨石を兼ねていたものと思われる。

チョッピングトール（図版11、第14図）

本遺跡から頁岩製の大型のチョッピングトールが1点だけ出土している。

資料№126がそれで、片面は礫に3回の大きな剥離を加えているが、½ほどは礫面を残している。もう一方の面には8回の剥離を加えた後に細部加工を加えて刃部を仕上げている。出土状況は、前述のとおりで大型剥片と一緒に刃部を真上にして出土した。重量が1220gもあって、この石器を手に握ったり、柄を付して振り廻すには、相当の力が必要で、このような使用方法はあまり考えられないから、出土状況のところで記述のような使用方法が当を得ているものと思われるのである。

チョッパー（図版12）

本遺跡からは2点の出土があるが、出土数は少ない方である。

チョッパーの用途は、物を削るとか、その重量を利用して物を切截することが考えられるのである。柄を付したかどうかであるが、形態がずんぐりしており、柄を付すには無理があるから、手に握って使用したものと考えられる。

№237：　やや扁平な頁岩の自然礫の一方の面から3回の粗い剥離を行った後に、さらに2回の調整剥離を行い刃部を形成している。したがって、剥離が加えられている面は一方で、反対の面は自然面をそのまま残している。長さ114mm、巾108mm、厚さ70mm重量875gで手に握って使用するのには可能の大きさである。

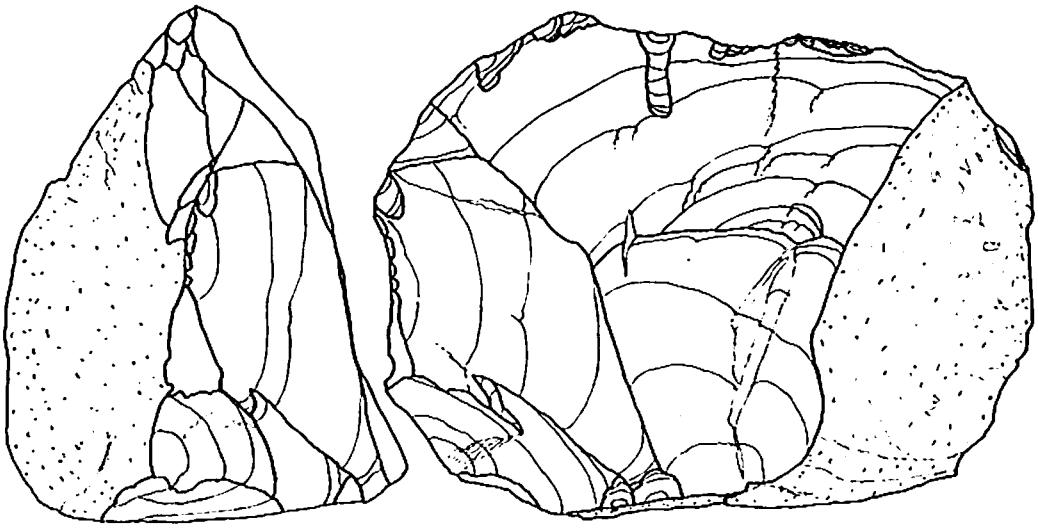
№143：　頁岩製で上記のものより小型で、刃部の作出は若干異なっている。本資料はフズリナ化石を含む円礫を使用しており、この化石の産地が同定されれば、礫を採集した河川が判明する貴重な資料である。長さ73mm、巾92mm、厚さ64mm、重量は430gある。

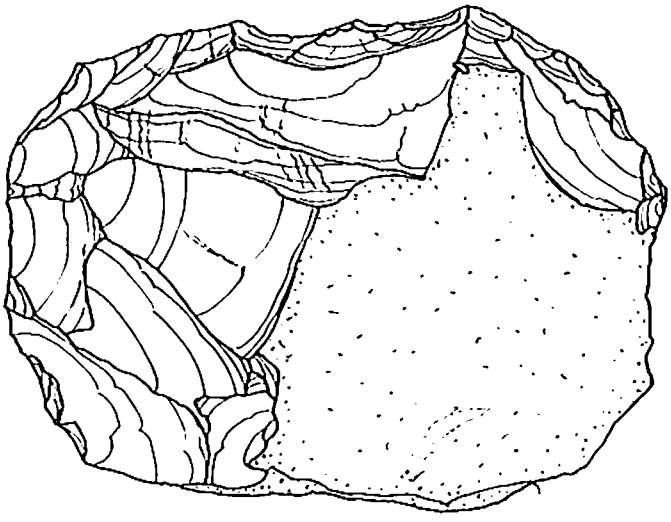
石　　刃（図版8、9、第9、15図）

食物の調理等における切截具と考えられる石刃が7点出土している。

本遺跡からは、北海道博岸遺跡（大場ほか　1956年）のような真正な石刃用石核の発見がないので確定し得ないが、見事な縦長剥片を作出して、その側縁に細部加工を施したものがあるので石刃として分類した。

№337：　表面採集資料であるが、縦長剥片を素材とし、主要剥離面の右側縁辺の下半部に細部加工がある。背面の先端部にわずかながら自然礫面を残している。

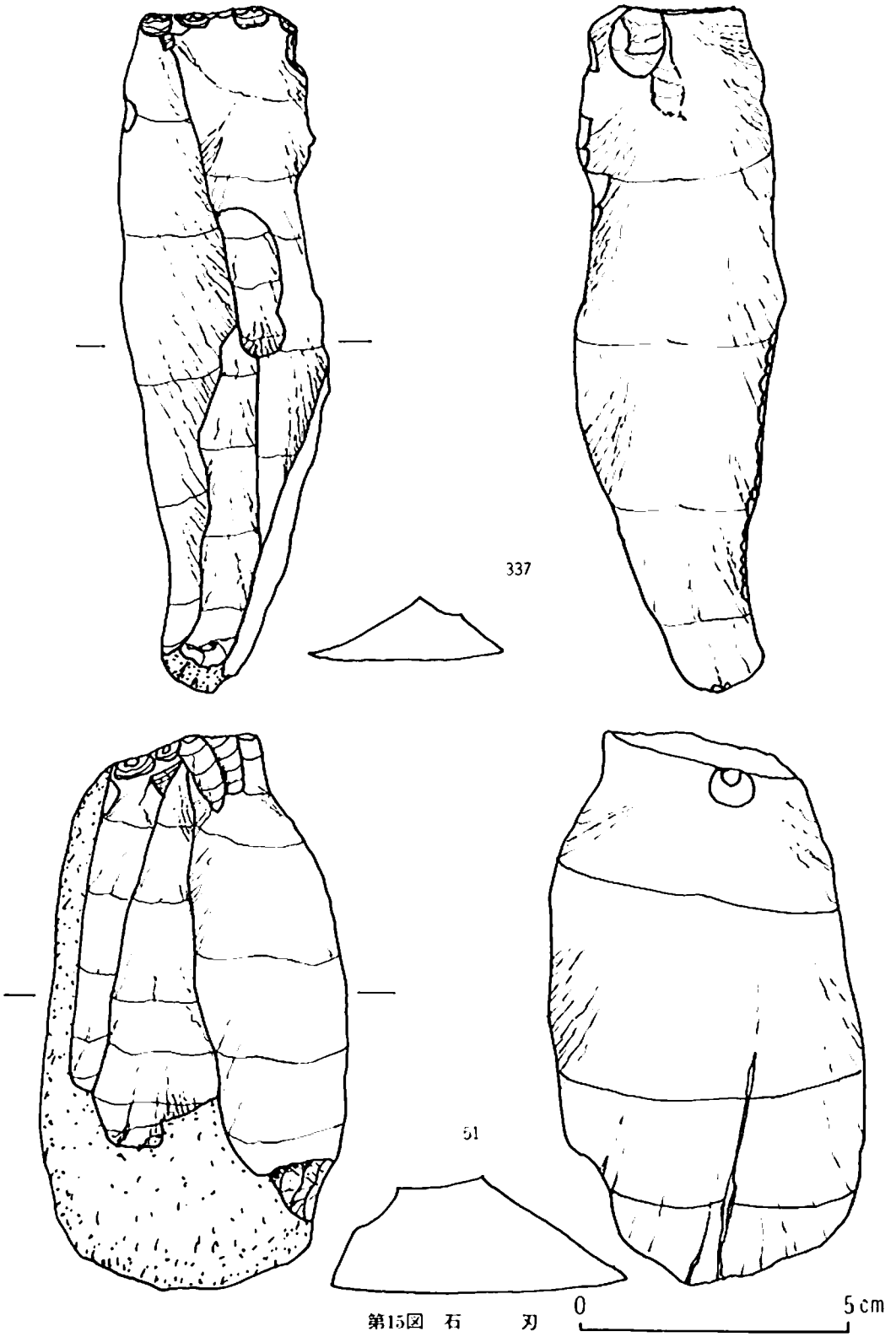




126

0 5cm

第14図　No.126 チョッピングトール



第15図　石　　刃

長さ127mm、巾35mm、厚さ11mmと大型のもので頁岩製である。剥離角109°

No188—2： 硅岩の縦長剥片によって作られている。主要剥離面にはバルブを残している。先端部は節理によって欠損している。長さ51mm、巾26mm、厚さ10mm、剥離角は114°である。

No51： 比較的厚い剥片を用いている。主要剥離面には、3本の稜が通っているが、左側縁辺と先端部は自然礫面を残していて、この石刃を剥離した石核は礫の上部を剥離して、その平坦部を打面にした石核であることが判る。両側縁辺とも鋭くて切截具としては申し分ない。長さ102mm、巾55mm、厚さ22mm、剥離角は110°で頁岩製。

第2表 桝形遺跡出土遺物一覧表

資料No	器種	石質	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	打角(°)	レベル(cm)	備考
1	剥片	頁岩	29	28	7.5	6.2		170.5	
2	縦長剥片	硬質頁岩	(22)	16	2.5	1.1		176.0	基部破片
3—1	剥片	頁岩	30	14	9	3.7		172.6	
3—2	〃	〃	18	21	4	1.6		172.6	
4	細石刃用石核	〃	27	39	23	37.5		175.9	
5	自然礫	安山岩	112	97	36	550		169.9	
6—1	剥片	頁岩	17	24	3.5	1.6		164.5	
6—2	砕片	〃	11	7	4	0.3		164.5	
7	自然礫	安山岩	12	8	3	0.3		169.4	
8	剥片	頁岩	22	26	6	3.5		159.7	
9	細石刃	〃	(19)	5	1	0.1		160.2	バルブ面欠損
10	剥片	〃	26	14	7	3		169.5	
11	〃	〃	32	48	8	14.5		169.5	
12	石核	硅岩	29	34	17	18.7		159.3	
13	剥片	頁岩	36	37	22	40		171.8	
14	自然礫	安山岩	97	67	55	380		161.2	
15	削器	〃	110	68	34	245	126	156.4	
16	自然礫	〃	66	54	49	191		158.9	
17—1	剥片	頁岩	43	30	11	15.3		152.5	
17—2	〃	〃	18	18	5	1.1		152.5	
18	〃	〃	12	17	3	0.6		149.2	
19	〃	〃	30	14.5	6	3	115	149.6	
20	〃	〃	(71)	56	10	36.3		148.5	バルブ面欠損
21	〃	〃	20	18	7	2.6		156.0	
22	自然礫	安山岩	83	78	69	610		159.5	
23	縦長剥片	頁岩	38	14	3	2.4		155.3	
24	剥片	〃	23	37	16	16.8		144.4	
25	〃	〃	13	26	6	2		153.0	
26	〃	〃	45	56	16	48		146.5	
27	細石刃	硬質頁岩	(23)	8	2	0.5		148.3	バルブ面欠損
28—1	ハンマーストーン	頁岩	82	62	56	398		152.2	
28—2	〃	硬砂岩	73	81	48	425		152.2	
29	剥片	頁岩	65	40	13	29.5		158.0	

資料No	器種	石質	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	打角(°)	レベル(cm)	備考
30	〃	〃	13	17	4	1.2		140.2	
31	剥片	頁岩	17	23	6	2.2		138.0	
32—1	削器	〃	54	30	13	17		137.8	バルブ面欠損
32—2	剥片	硬質頁岩	13.5	27	6	1.4		137.8	
33	〃	頁岩	34	20	8	4.9		128.5	
34	〃	〃	17	37	11	4.6		137.0	
35—1	〃	〃	45	36	11	19.1	119	138.2	
35—2	〃	硅岩	25	37	11.5	13.9		138.2	
36	削器	安山岩	83	46	14	76	110	122.3	
37—1	剥片	頁岩	32	34	8.5	11.7	112	114.5	
37—2	〃	〃	24	18	5	2.5		114.5	
38	掻器	硬質頁岩	(23)	20	5	2		135.5	バルブ面欠損
39	剥片	頁岩	22	18	7	2.2		118.3	
40	〃	硅岩	9	15	2	0.4		105.9	
41	〃	硬質頁岩	13	7.5	1	0.2		118.8	
42	〃	頁岩	44	27	11	3.5		116.1	
43	〃	硬質頁岩	(16)	10	2	0.5		112.5	先端部欠損
44	〃	頁岩	(11)	14	3.5	0.7		115.6	先端部欠損
45	細石刃	〃	13	6.5	2	0.2		107.4	
46	剥片	硅岩	24	11	7	1.5		113.6	
47	石核	〃	49	12	17	17.2		103.7	
48	剥片	〃	—	—	—	—		106.2	資料検討中
49	削器	〃	(50)	25	11	15.6		117.2	バルブ面欠損
50—1	剥片	硬質頁岩	50	27	9.5	16.1		110.0	
50—2	〃	頁岩	33	29	6	7.6	117	110.0	
51	石刃	頁岩	102	55	22	56	110	111.5	
52	自然礫	安山岩	196	130	74	2050		103.5	
53	剥片	頁岩	32	45	22	27		110.0	
54	自然礫	安山岩	87	76	35	193		102.2	
55—1	〃	〃	148	80	65	840		109.2	
55—2	細石刃	頁岩	14	7	1.5	0.2		109.2	
55—3	剥片	硬質頁岩	15	9	2.5	0.2		109.2	
55—4	〃	頁岩	15	11	3	0.4		109.2	
56	自然礫	安山岩	87	72	33	141		106.0	
57	剥片	頁岩	(20)	38	15	13.7	110	106.0	基部破片
58	剥片	頁岩	28	17	4	2.2		110.5	
59	〃	〃	32	44	11	17.3		112.6	
60	〃	〃	48	46	12	22.7		102.0	
61	〃	〃	35	59	16	41.0	129	106.8	
62	〃	〃	20	15	2	0.6		108.0	
63—1	自然礫	安山岩	122	92	58	675		104.2	
63—2	剥片	頁岩	14	12	13	0.5		104.2	
64	〃	硬質頁岩	13	7	1.5	0.2		111.0	
65	〃	頁岩	14	25	7	2.8		101.3	

資料No	器種	石質	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	打角(°)	レベル(cm)	備考
66	〃	〃	15	11	2	0.5		105.3	
67	〃	〃	22	29	7	3.3		103.4	
68	磨石		86	78	54	510		106.4	
69	削器	頁岩	150	132	57	1010		100.5	
70	剥片	硬質頁岩	14	23	3	1.0		102.4	
71	〃	頁岩	45	40	12	28	111	103.7	
72	縦長剥片	安山岩	(49)	55	21	72.4	103	98.3	基部破片
73	剥片	頁岩	54	49	26	55.2		98.9	
74	〃	硬質頁岩	34	32	6	7.1	111	96.2	
75—1	砕片	〃	4	7	1	0.05		92.4	
75—2	剥片	頁岩	27	23	1	3.3		92.4	
76	〃	〃	48	42	17	34.2		88.6	
77	〃	〃	26	12	6	2.2		87.5	
78	〃	〃	53	21	9	9.0	107	95.3	
79	〃	〃	—	—	—	—		94.5	資料検討中
80	細石刃用石核	〃	28	62	24	49.5		100.5	
81—1	〃	〃	33	61	24	49.5		96.3	
81—2	削器	〃	23	32	8	9.1		96.3	先端及び基部欠損
82	剥片	〃	—	—	—	—		103.6	資料検討中
83	細石刃	硬質頁岩	15	5	1.5	0.1		95.2	
84	細石刃用石核	頁岩	30	51	19	38	108	102.1	剥片利用、フルーティングなし
85	石刃	〃	113	48	20	108		87.6	
86	剥片	〃	16	24	4	1.4	111	177.0	
87	自然礫	安山岩	66	49	40	113.7		172.5	
88	剥片	頁岩	55	81	15	63.2	104	163.3	
89	自然礫	安山岩	62	92	34	189		150.5	
90	〃	〃	77	56	49	110		149.5	
91	舟底形石器	頁岩	—	—	—	—		147.2	資料検討中
92	スキー状スポール	〃	11	43	12	5.3		142.5	
93	砕片	〃	10	19	4	0.9		124.5	
94—1	細石刃	硬質頁岩	(16)	6.5	1	0.2		122.8	先端部欠損
94—2	〃	〃	(6)	6.5	1	0.1		122.8	先端部及び基部欠損
95	剥片	頁岩	18	26	11	4.2		115.0	
96	〃	〃	34	27	8	4.6		104.5	
97	〃	〃	10	5	1	0.1		108.4	
98—1	〃	〃	16	24	4	1.8		106.5	
98—2	〃	〃	18	10	2.5	0.3		106.5	
99	〃	〃	53	17	15	20.4		105.2	
100	砕片	〃	15	10	4	0.6		108.7	
101	〃	硬質頁岩	6	5	1.5	0.05		108.7	
102	〃	頁岩	13	9	2	0.3		108.5	
103	剥片	〃	31	45	10	10.2	120	108.0	
104	細石刃	〃	(8)	7	1.5	0.1		106.5	基部破片
105	剥片	〃	14	17	3	0.5		108.5	

資料No.	器種	石質	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	打角 (°)	レベル (cm)	備考
106	〃	硬質頁岩	10	6.5	1.5	0.2		103.2	
107	砕片	頁岩	9	10	1	0.2		103.7	
108	細石刃用石核	硅岩	38	35	20	38		98.5	
109	剥片	頁岩	23	7	5	1.0		107.5	
110	砕片	〃	5	5	1	0.1		107.5	
111	剥片	硬質頁岩	45	21	11	6.9		107.3	
112	石核	頁岩	35	48	21	11		108.0	
113	剥片	〃	8	4.5	1	0.1		108.0	
114	砕片	〃	6	5	1	0.05		106.4	
115	剥片	〃	19	11	2	0.2		102.7	
116	自然礫	安山岩	172	109	69	1270		97.0	
117	細石刃	硅岩	(10)	7	1.5	0.2		84.5	基部欠損
118	自然礫	安山岩	35	22	17	8.8		92.1	
119	掻器	頁岩	—	—	—	—		109.0	資料検討中
120	ハンマーストーン	砂岩	84	51	49	280		106.0	
121	自然礫	安山岩	32	27	13	15.3		101.2	
122	剥片	頁岩	26	23	6	4.5	106	100.4	
123	ハンマーストーン	安山岩	91	58	54	428		95.0	
124	剥片	頁岩	60	29	12	16.7		101.5	
125	細石刃	〃	11	6	2	0.2		94.5	基部破片
126	チョッピングトール	〃	109	139	83	1220		97.0	
127	舟底形石器	〃	—	—	—	—		98.3	資料検討中
128	細石刃用石核	〃	—	—	—	—		105.3	〃
129	細石刃	硬質頁岩	(14)	4	1	0.1		104.6	先端部及びバルブ面欠損
130	〃	頁岩	14	6	2.5	0.2		84.5	
131	自然礫	安山岩	121	80	69	700		97.3	
132	剥片	頁岩	(13)	13	3	0.6		108.5	先端部欠損
133	〃	〃	43	36	9	17.7	114	127.5	
134	自然礫	安山岩	73	63	53	180		132.9	
135	〃	頁岩	15	9	4	0.4		126.0	
136	剥片	〃	13	19	3	0.7		74.6	
137	〃	〃	39	63	10	20		88.5	
138	〃	〃	10	10	2.5	0.3		94.6	
139	〃	〃	66	40	11	29.7		92.5	
140	スキー状スポール	〃	16	50	14	10.1		95.5	
141	自然礫	安山岩	104	98	64	510		91.3	
142	剥片	頁岩	36	20	8	6.5		83.5	
143	チョッパー	〃	73	92	64	430		88.0	
144	剥片	〃	54	73	13	48.8	105	106.5	
145	〃	〃	44	24	8	8.4		104.3	
146	削器	〃	47	34	15	18.5		100.5	
147	砕片	安山岩	17	7	3	0.2		104.5	
148	剥片	頁岩	45	56	18	58.5	122	108.3	
149	削器	〃	42	63	13	31.1	109	121.5	

資料No	器種	石質	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	打角(°)	レベル(cm)	備考
150	剥片	硅岩	31	11	7	1.8		120.0	
151	〃	頁岩	22	11	4	0.5		120.6	
152	〃	〃	43	48	23	57.2		118.0	
153	砕片	〃	18	14	4	1.0		122.1	
154	剥片	〃	(15)	24	4	2.0		115.8	先端部欠損
155	スキー状スポール	頁岩	(33)	9	5	1.5		125.0	基部欠損
156—1	砕片	硅岩	11	8	2.5	0.1		123.2	
156—2	〃	頁岩	10	8	4	0.1		123.2	
157	削器	硅岩	33	44	27	40.1		123.0	
158	縦長剥片	頁岩	78	35	9	34.3		128.7	
159—1	自然礫	安山岩	154	96	62	1180		132.3	
159—2	細石刃	硬質頁岩	(12)	5	1	0.1		132.3	基部破片
159—3	剥片	頁岩	11	7	1.5	0.1		132.3	
159—4	砕片	〃	1.9	2.4	5	0.4		132.3	
160	細石刃用石核	硅岩	32	34	25	31.5		128.5	
161	剥片	頁岩	15	11	3	0.6		132.5	
162	〃	〃	7	13	5	0.2		132.5	
163	自然礫	安山岩	121	93	63	720		146.1	
164	縦長剥片	頁岩	(36)	11	4	1.9		145.5	先端部欠損
165	縦長剥片	〃	(55)	41	9	17.5	116	139.8	先端部欠損
166	石核	〃	27	48	20	35.3		131.0	
167	縦長剥片	〃	136	65	20	160	108	148.3	
168	剥片	〃	12	23	4.5	1.4		146.1	
169	ハンマーストーン	〃	80	50	38	200		147.5	
170	剥片	頁岩	13	12	4	0.9		147.5	
171	〃	〃	44	78	24	79		155.2	
172	自然礫	安山岩	80	59	46	182		164.0	
173	削器	頁岩	43	67	23	88.8		165.0	
174	〃	〃	84	66	26	152.2	118	163.5	
175	剥片	〃	28	21	11	6.5		159.5	
176	〃	〃	13	24	5	1.6		171.6	
177	〃	〃	35	14	15	10.5		159.0	
178	細石刃用石核	硅岩	29	35	22	30		164.2	
179	剥片	頁岩	40	37.5	17	14.6		166.0	
180	剥片	硬質頁岩	25	14	8	2.2		160.5	
181	舟底形石器	頁岩	31	62	39	54.5		167.2	
182	剥片	〃	25	62	9	11.8		168.0	
183	〃	〃	29	18	9	4.1	112	160.5	
184	〃	〃	11	13	2.5	0.4		179.5	
185	細石刃	硬質頁岩	(17)	5	1	0.1		180.0	先端部欠損
186	剥片	頁岩	36	11	2.5	0.7		158.3	
187	自然礫	安山岩	99	62	27	153		135.9	
188—1	〃	〃	89	68	68	430		143.0	
188—2	石刃	硅岩	51	26	10	12	114	143.0	

資料No	器種	石質	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	打角(°)	レベル(cm)	備考
189	自然礫	安山岩	88	71	63	440		142.8	
190	剥片	硬質頁岩	18	23	12	3.9		105.5	
191	削器	〃	34	14	3.5	2.4		109.3	
192	自然礫	安山岩	92	51	34	182		160.0	
193	剥片	硅岩	17	15	5	2.0		164.0	
194	砕片	頁岩	7	6	2	0.1		163.2	
195	剥片	〃	10	5	2	0.1		155.2	
196	細石刃	硅岩	12	4	1	0.1		173.8	
197	細石刃用石核	頁岩	23	42	27	27		159.7	
198	剥片	〃	22	12	6	1.6		164.8	
199	砕片	〃	6	3	3	0.1		167.5	
200	細石刃	〃	21	5	1	0.2		157.5	
201	〃	〃	11	4	1	0.1		164.6	
202	〃	〃	8	5	1	0.1		154.0	
203	自然礫	安山岩	13	16	9.5	1.9		172.0	
204	剥片	頁岩	29	14	6	2.7		171.8	
205	自然礫	安山岩	69	69	53	157.5		174.0	
206	剥片	硅岩	25	14	5	1.7	102	171.5	
207	自然礫	安山岩	9	7	8	0.4		170.5	
208	砕片	硬質頁岩	5	8	1	0.1		166.5	
209	自然礫	安山岩	43	22	13	13.7		175.3	
210	〃	〃	9	8	3	0.1		180.4	
211	〃	〃	7	10	5	0.2		179.3	
212	〃	〃	9	4	3	0.1		177.3	
213	細石刃	頁岩	(9)	4	1	0.05		175.6	先端部及び基部欠損
214	剥片	〃	25	23	3.5	2.2		177.5	
215	自然礫	安山岩	3	3	3	0.1		175.5	
216	細石刃	硅岩	(17)	6	1	0.2		171.0	先端部欠損
217	剥片	頁岩	31	30	13	12.2		158.0	
218	剥片	頁岩	20	37	8.5	6		163.4	
219	細石刃	〃	7	3	1	0.05		169.3	先端部及び基部欠損
220	砕片	硅岩	10	15	8.5	1.3		160.5	
221	自然礫	〃	9	20	6	1.5		160.5	
222	細石刃	頁岩	7	4	1	0.1		114.5	
223	スキー状スポール	硬質頁岩	10	35	4.5	1.7		116.0	
224	細石刃	〃	(10)	5	1.5	0.1		117.0	基部破片
225	剥片	頁岩	7	8	2.5	0.1		118.6	
226—1	細石刃	〃	20	4	1	0.2		156.4	
226—2	剥片	〃	33	14	9	4.2		156.4	
227	〃	〃	26	33	12.5	12.2		111.0	
228	細石刃	硅岩	18	4	2	0.1		109.2	
229	〃	頁岩	7	4	1	0.1		110.5	
230	剥片	〃	60	38	17	59.5	107	165.0	
231	自然礫	安山岩	91	65	28	148		161.8	

資料No	器種	石質	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	打角(°)	レベル(cm)	備考
232	〃	〃	72	68	66	230		172.8	
233	〃	〃	—	—	—	—		172.5	資料検討中
234	剥片	頁岩	29	36	4	4.5		110.5	
235	〃	〃	42	51	15	28		106.5	
236	細石刃	〃	17	4	1	0.1		100.5	
237	チョッパー	〃	114	108	70	875		上96.0 下103.3	
238	砕片	〃	8	10	2	0.1		168.2	
239	自然礫	安山岩	186	139	88	2500		上157.4 下169.0	
240	剥片	硬質頁岩	15	16.5	5	0.9		103.7	
241	細石刃	〃	8	6	1	0.1		170.0	
242	砕片	頁岩	21	9	4	0.7		177.3	
243	剥片	〃	18	14	12	2.7		174.2	
244	砕片	〃	13	8	6	0.7		161.0	
245	細石刃	〃	8	10	2	0.2		156.8	
246	剥片	〃	15	6	2.5	0.3		162.5	
247	砕片	〃	—	—	—	—		157.5	資料検討中
248	剥片	頁岩	9	10	3	0.1		170.5	
249	砕片	〃	8.5	6	1.5	0.05		158.4	
250	剥片	〃	25	23	6	3.5		153.0	
251	剥片	頁岩	21	13	6	2.3		151.8	
252	自然礫	安山岩	6	10	8	0.2		148.5	
253—1	剥片	頁岩	18	15	4			149.4	
253—2	〃	〃	38	40	7	11.6	100	149.4	
254	〃	〃	17	10	4	0.7		149.5	
255	砕片	〃	12	12	2	0.2		149.5	
256	剥片	〃	31	32	10	12.2		135.5	
257	〃	〃	43	30	11	11.8	113	137.4	
258	〃	〃	54	29	14	24.2	129	137.3	
259	細石刃	硅岩	(12)	5	1	0.2		113.2	基部破片
260	細石刃用石核	頁岩	—	—	—	—		106.5	資料検討中
261	彫器	硅岩	40	27	11	15		118.5	
262	剥片	頁岩	40	13	8	4.8		115.2	
263	〃	〃	33	38	10	13		117.3	
264	〃	〃	16	15	4	0.7		115.0	
265	砕片	〃	—	—	—	—		115.8	資料検討中
266	剥片	硬質頁岩	11	8	3	0.1		120.5	
267	〃	頁岩	17	8	3	0.5		116.2	
268	〃	〃	16	20	4	1.3		107.5	
269	〃	〃	52	16	11	11.5	114	108.8	
270	〃	〃	24	22	9	6.3		123.5	
271	細石刃	〃	(22)	8	1.5	0.3		119.4	先端部欠損
272	剥片	硬質頁岩	23	12	3	0.9		119.5	
273	砕片	頁岩	10	15	2	0.7		118.4	
274	〃	硬質頁岩	14	5	4	0.3		119.3	

資料No	器種	石質	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	打角(°)	レベル(cm)	備考
275	細石刃	頁岩	(6)	5	1	0.1		118.5	先端部及び基部欠損
276	〃	〃	(8)	6	2	0.2		117.8	基部破片
277	剥片	〃	23	22	5	2.9	113	116.5	
278	自然礫	安山岩	57	49	23	63.3		113.5	
279	剥片	頁岩	30	14	7	2.7	113	102.4	
280	舟底形石器	〃	—	—	—	—		111.0	資料検討中
281	剥片	頁岩	15	11.5	2	0.5		120.4	
282	〃	〃	(6)	6	1	0.1		110.6	先端部欠損
283	砕片	〃	9	6	1	0.1		112.0	
284	剥片	頁岩	13	14	4	0.6		99.9	
285	〃	〃	(8)	7	2	0.2		95.5	先端部欠損
286	〃	〃	44	38	15	16.9		103.4	
287	〃	硬質頁岩	40	36	5	12.8		176.0	
288	〃	硅岩	17	14	3.5	1.0		170.5	
289	細石刃	頁岩	(14)	6	1	0.1		176.3	先端部欠損
290	剥片	硬質頁岩	20	10	2.5	0.5		167.6	
291	自然礫	安山岩	103	80	67	570		上165.0 下171.5	
292	剥片	頁岩	9	25	3	0.9		168.0	
293	〃	〃	10	11	3	0.3		169.0	
294	細石刃用石核	〃	30	50	31	59		131.7	
295	剥片	〃	38	24	15	17.5		120.5	
296	〃	〃	—	—	—	—		134.0	資料検討中
297	砕片	頁岩	13	7	3	0.5		129.7	
298	〃	硬質頁岩	9	8.5	1	0.6		132.0	
299	細石刃	〃	22	7	2	0.3		126.3	
300	剥片	頁岩	22	10	5	0.9		126.3	
301	〃	〃	27	23	5	2.6		128.0	
302	砕片	〃	11	7	2	0.2		121.5	
303	剥片	〃	14	8	3	0.4		122.0	
304	〃	〃	48	30	11	14	108	119.3	
305	〃	〃	48	27	15	18.7		115.0	
306	〃	硅岩	23	25	3	1.9		111.0	
307	自然礫	安山岩	81	62	51	200		112.6	
308	砕片	頁岩	7	4	1	0.05		113.0	
309	細石刃	〃	10	7	2	0.2		105.0	
310	〃	〃	(15)	6	1.5	0.1		104.0	先端部欠損
311	剥片	〃	27	34	9	9.5		108.2	
312	〃	〃	17	14	3	1.0	113	103.5	
313	砕片	〃	13	11	4	0.5		132.5	
314	自然礫	安山岩	79	68	51	300		102.5	
315	砕片	頁岩	48	38	10	21.4		136.3	
316	剥片	〃	46	18	8	7.4	111	122.5	
317	〃	〃	12	26	8	2.1		96.5	
318	自然礫	安山岩	79	58	17	101		107.6	

資料No	器種	石質	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	打角(°)	レベル(cm)	備考
319	剥片	頁岩	23	26	5	3		110.0	
320	砕片	〃	10	4	3	0.1		112.0	
321	剥片	硅岩	(25)	27	5	3.9		112.0	バルブ面欠損
322	細石刃	—	—	—	—	—		123.0	資料検討中
323	剥片	頁岩	16	9	2	0.4		164.3	
324	〃	〃	21	7.5	4	0.6		171.0	
325	砕片	〃	9	9	3	0.3		177.5	
326	剥片	〃	16	10	3	0.4		177.5	
327	細石刃	〃	8	6	1	0.1		177.3	基部破片
328	砕片	〃	8	15	3.5	0.6		163.5	
329	剥片	〃	26	53	15	19.5		95.5	
330	砕片	安山岩	15	15	9	2.2		123.0	
331	木炭	—	17	12	9	0.4		130.1	
332	剥片	頁岩	10	28	4	1.9		121.0	
333	〃	〃	37	45	9	16		119.0	先端部及び基部欠損
334	砕片	安山岩	5	5	4	0.3		128.5	
335	〃	〃	16	13	4	0.7		136.5	
336	剥片	頁岩	30	34	8	7.2		130.4	
337	石刃	〃	127	35	11	150	109	—	東区表採
338	石刃	〃	76	41	12	36	105	—	〃
339	〃	〃	(33)	17	6	4		—	〃 先端部欠損
340	〃	〃	(71)	41	14	39.5	109	—	〃 〃
341	剥片	〃	28	33	9	12	111	—	〃
342	削器	〃	48	57	15	46.5		—	〃
343	木炭	—	25	13	10	0.5		—	〃
344	削器	頁岩	74	54	18	94.4	113	—	〃
345	剥片	〃	43	27	11	16	112	—	〃
346	〃	〃	31	52	18	30.9		—	〃
347	自然礫	硅岩	29	32	16	22.0		—	〃
348	剥片	〃	26	19	6	3.3		—	〃
349	細石刃用石核	頁岩	45	46	29	49.5		—	〃
350	石核	硅岩	35	38	13	18.7		—	〃
351	剥片	硬質頁岩	18	7	1.5	0.2		—	〃
352	剥片	硅岩	33.5	25	10	7.7		—	〃
353	石核	〃	32	12	8	4.0		—	〃 (フルーティングあり)
354	削器	〃	61	87	45	197		—	〃
355	剥片	頁岩	49	45	10	26.5		—	〃
356	スキー状スポール	〃	18	57	13	15		—	〃
357	剥片	〃	51	15	11	6.3		—	〃
358	舟底形石器	〃	—	—	—	—		—	〃 資料検討中(フルティングあり)

(注) この表でのレベルは、本遺跡が道路直下のために、表土からの深度を計測できなかったので、測量器面上(第3図におけるH、P点に設定)を0とした深度である。

7. 考　　察

(1) 石器の出土層位について

本遺跡の石器の出土層位は、上部ローム層中の板鼻黄色軽石層（Y．P）より下位の黄褐色ローム層の中にあり、石器は板鼻黄色軽石層（Y．P）の直下から、最深のものは板鼻黄色軽石層から測って37cmの間に包含されており、最も多い層位は20～30cmの所に集中していた。

従って、本遺跡の形成時期は板鼻黄色軽石が降下する以前であり、その時期は洪積世末にあたるものと考えられる。

板鼻黄色軽石層は、C^{14}の測定によって、10,650±250B. P (GAK 311) 等の数値が得られているので、本遺跡の形成時期は今から約12,000年前と考えられるのである。

かつて、本遺跡の出土層位が板鼻褐色軽石層（B．P）より下位ではないかとの見解（吉崎1963年）が示されたが、本遺跡の層位は明らかに板鼻黄色軽石層（Y．P）の下位、板鼻褐色軽石層（B・P）より上位の上部ローム層上半部にあるのである。

(2) 石器の組成について

本遺跡出土の石器は、石刃、細石刃、細石刃用石核、舟底形石器、削器、掻器、彫器、スキー状スポール、チョッパー、チョッピングトール、ハンマーストーン、磨石、小型石核であるが、本遺跡の特徴的な石器は、細石刃、細石刃用石核、舟底形石器である。

細石刃は39点の出土があり、骨角器や木器に植え込まれて槍や銛の刃先として使用されたと考えられる。しかし、細石刃としたものの中には、細石刃用石核から剥離したものばかりでなく、舟底形石器の樋状剥離から生じたスポールがあるはずであるが、区別することは困難である。

細石刃を製作した細石刃用石核には、Ⅰ類とした湧別技法による札滑型類似のもの、Ⅱ類とした幌加型類似のもの、Ⅲ型とした幌加型の亜型式のもの、Ⅳ類とした樹形遺跡独自の型式と思われる縦長剥片を利用したもの、Ⅴ類とした峠下技法によるものがある。

本遺跡の出土の細石刃用石核の製作技法は前述のとおり削片系のものと非削片系のものの石刃技法があり多様であって、複雑な様相を示しているが、Ⅳ類としたものは、今まで他の遺跡からの報告例がないことから、本遺跡の特徴的な製作技法と認められるので「樹形技法」と仮称したい。

樹形技法による細石刃用石核は、広郷技法（加藤ほか　1980年）と同様に縦長剥片を素材に用いるが、平坦打面の部位が異なるのである。

すなわち、広郷技法は細石刃の剥離が縦長剥片の側縁にそって行われるのに対して、桝形技法では、縦長剥片の先端部に主要剥離面を打面として細石刃剥離を行い、縦長剥片の背面が舟底となる形をとっている。

次に、II類とした幌加型（横山　1980年）類似のものは接合資料が確認されていないので、幌加型と断定はできない。

なぜなら、I類の例のように粗い両面調整素材の上半部を剥離して平坦打面を作出後に、平坦打面から両側面に細部加工を行った可能性もあるからであるが、もしも、このような製作工程をとったものなら、湧別技法による白滝型あるいは札滑型の亜型式として区分することができる。

なお、接合資料については、現在検討中なので本遺跡出土のスキー状スポールとの関係は不明である。

本遺跡の舟底形石器は、甲板面が長く、かつ、巾広で大型のものが多く、樋状剥離痕を有するものと、有しないものがある。

この舟底形石器は、スクレイパーの一種と考えられるが、中には細石刃用石核とすべきものもあるかも知れない。

調理用具や工具には、肉等の切截具としての石刃、ノミとしての彫器、切截や削るための削器、皮剥ぎとしての掻器等の出土があり細石刃と考え合わせると、当時、狩猟活動が盛行していたことをうかがい知ることができる。槍や銛を製作するために必要な彫器の出土数が少なく、同類の遺跡に比較すると特異な存在と言わざるを得ない。

労働用具としてのチョッパー、チョッピングトール、ハンマーストーン、磨石もそれぞれ出土している。このような礫そのものを道具としたものや礫に簡単な加工を加えた道具は、下部田石器時代から使用されており、新里村夏井戸遺跡等からもかなりの数が発見されていることから分るように、息の長い石器である。

特に、チョッパー、チョッピングトールは東南アジアから東アジアに広く分布してチョッパー、チョッピングトール文化圏を形成しているといわれ、アフリカ、ヨーロッパ、中東、インド亜大陸に分布するハンドアックス文化圏に対峙していて、本遺跡もこの分布圏に含まれるのである。(最近では、東アジアからもハンドアックスが発見されている。)

舟底形石器も、中国大陸、シベリア、アリューシャン、アラスカからも多数の出土があり、北太平洋沿革に一大文化圏を形成していたもののようである。

本遺跡を遺した人々は、血縁家族を中心とした共同体社会であったと考えられるが、その使用する道具は諸外国や他の日本の遺跡、ことに東北地方から北海道方面のものに類似し、その方面の文化の影響を強く受けていたのである。多分、北海道方面からヴュルム氷期の末期の津軽海峡のせばまった時期に伝来した文化と考えられるのである。

(3) 群馬県下における細石器文化について

桝形遺跡とほぼ同一の舟底形石器を石器組成に持つ遺跡は知られていないが、新田郡笠懸村和田遺跡（若月　1980年）から舟底形石器の出土があったが詳細は未発表のためはっきりしたことは分らない。

他の細石刃文化としては勢多郡新里村広間地遺跡（相沢　1956年）、同村生目遺跡（同前）、新田郡笠懸村稲荷山遺跡（若月　1980年）のほか、筆者の採集資料（勢多郡富士見村丸山遺跡）などの数か所が知られている。

次に細石器文化以前の文化との関係についても前後関係を確定できる現況ではない。

黄褐色ローム層上半部に包含されていた石器文化としては、本遺跡のほかに新里村武井遺跡（杉原　1977年）、新里村元宿遺跡、大胡町三ツ屋遺跡等があるが、文化の前後関係を論ずるには資料不足であり、この点についても今後解明すべき問題である。

次に赤堀村石山遺跡（相沢　1967年）は尖頭器を多量に出土したことで著名であるが、明らかに板鼻黄色軽石層より上位の黄褐色ローム層に包含されており、新潟県中林遺跡（芹沢　1966年）等の発掘所見と類似しており、これらの文化が縄文時代の直前の文化であることは疑いのないところである。

石山遺跡では、文化の鍵層となる板鼻黄色軽石層が10cm位堆積しており、このような場所で複合遺跡を発掘できれば、編年作業もスムースに進められるので、このような条件のよい遺跡の発見に努める必要性を痛感するのである。

第3表は、相沢忠洋の想定している群馬県下における旧石器文化の編年表であるが、参考のために掲載するものである。

(4) 他地域の石器文化との対比

杉原荘介氏の見解によれば、本州における細石器文化は烏帽子型細石刃用石核を出土する長野県矢出川遺跡（芹沢　1964年）、静岡県休場遺跡（杉原・小野　1965年）を一番古く、次に半舟底形細石刃用石核の出土する新潟県荒屋遺跡（芹沢　1959年）をおき、その次に白滝型細石刃用石核を持つ新潟県中土遺跡（中村　1965年）、さらにその次に有茎尖頭器を有する新潟県中林遺跡へと発展したと推定し、北海道の各遺跡に対比しているのである。

半舟底形細石刃用石核を有する札滑遺跡と荒屋遺跡、白滝型細石刃用石核を有する白滝服部台遺跡と中土遺跡、有茎尖頭器を有する立川遺跡と中林遺跡をそれぞれ対比させ、さらに白滝服部台遺跡と立川遺跡の間に烏帽子型細石刃用石核を有する置戸安全遺跡を入れている。（杉原1975年）

一方、吉崎昌一氏は北海道における細石刃文化の編年を白滝13→ホロカ沢1→トワルベツ→白滝33→白滝30→立川とし、ホロカ型彫器と舟底形石器の組合せを持つ文化から、湧別技法

第3表　群馬県旧石器文化編年表

年代	地質			時代・文化			編年		
9,000年	第四紀	沖積世		先史	新石器	縄文	○鹿島 ○西鹿田B ○新田町 ○西鹿田A	土器	押形文 縄線文 爪形文 隆起線文
1万年 10,650±250 BP C14 11,300±400 BP C14 （浅間）		洪積世	関東ローム		旧石器	上部ローム	▷新里生目 ▷赤堀石山 板鼻黄色浮石層（浅間山爆発） ▽新里 ▽赤城 ▽大胡 元宿 樹形 三屋 板鼻褐色浮石層（浅間山爆発） ▷清水山	尖頭器	細石刃 石刃
24,000±650 BP C14 （前橋泥流）						中部ローム	第一黒色帯 ▷岩宿 I 鹿沼浮石層（赤城山爆発） ▷桐原 ▷権現山 II 八崎浮石層（榛名山爆発） ▷権現山 I		撥形石器
7万年以前						下部ローム	湯之口浮石層（赤城山爆発） ▽赤堀 ▽不磯 ▽夏井 二山戸		

による舟底形石器と荒屋形彫器を持つ文化に推移し、さらに有茎尖頭器を持つ文化へと発展したとし、立川遺跡文化を最も後出の文化と考えている。（吉崎　1963年）

桜形遺跡では、札滑型、峠下型、ホロカ型、桜形型等の細石刃用石核を有して複雑な文化であるが、新潟県中土遺跡や北海道白滝服部台遺跡の文化に最も近い文化と思われる。また、彫器について見ると、桜形遺跡と中土遺跡には荒屋型彫器がなくて、白滝服部台遺跡には、わずかながら認められる。

同じ関東地方の舟底形石器の出土状況を見ると、茨城県後野遺跡（後野遺跡調査団　1975年）があり、ここでも舟底形石器と荒屋型彫器が出土しており、その他にも数遺跡が知られている。

石器組成からみても相当複雑な様相を持つ桜形遺跡の分析、検討が十分でない現況において結論を出すのは早計と思われるので、差控えたいが、いずれにしても、本遺跡が形成された時期は洪積世末の板鼻黄色軽石（Ｙ．Ｐ）の降下する以前の文化であり、新潟県荒屋遺跡、同中土遺跡、青森県大平山元Ⅱ遺跡、北海道白滝服部台遺跡、同ホロカ沢遺跡、同タチカルシュナイ遺跡等の細石刃文化に近縁の文化であることは確かである。

8.　おわりにあたって

本遺跡は、昭和26年の第一次調査以来、多くの問題を提起した重要な遺跡として注目されていたのであるが、第一次調査は小規模な発掘調査であり、資料数も少なく十分な検討を加えることができなかった。

相沢忠洋の22年もの悲願がようやくかなって、昭和48年の12月に第二次調査を実施することができたものである。

この第二次調査においても、道路工事による緊急発掘調査であり、調査期間も短かく、かつ、遺跡の主体部が道路の直下ということもあって、表土の上半部が欠失していたり、水道本管の敷設により、遺跡の一部が既に破壊されていた等のことにより、必ずしも、十分の調査ができたとは言いがたいのである。

さらに、上部ローム層に包含される文化層の鍵層とされる板鼻黄褐色軽石層（Ｙ．Ｐ）が、給供火山の浅間山から遠い赤城山東南麓や、東毛地区においては明瞭な堆積状況を示してないため、板鼻褐色軽石層前後の文化のは握がむずかしく、編年作業を困難なものとしている。

以上のように、調査考察も十分とは言えないが、本遺跡の第二次調査を無事終了し、ここに、報告書を作成することができた。

報告書を刊行したとは言うものの、桜形遺跡の学問的な追求は、やっと出発点に立ったという現状である。

今後は、遺されていた資料をもとに研究、考察を重ね、桝形遺跡を遺した祖先の生活を復原してゆくとともに、この文化の歴史上の位置や、他の遺跡との関連等をより一層正確には握して行く必要があると思う。

本書の作成は、本遺跡を世に出した調査担当者でもある赤城人類文化研究所長の相沢忠洋の手で行われるべきものであるが、その準備を始めた矢先の昭和55年8月上旬不幸にも、多年の過労がもとで病気で倒れて現在も療養中である。

このため、第二次調査に参加し、日頃、先生の指導を仰いでいる筆者が、浅学をも顧みずに本書の作成を行ったために満足のゆく報告書とすることができず、研究者各位の期待に添えるものでないことをお詫びする次第である。

本書の誤りや不十分な点については、研究者各位の御叱正、御叱咤をいただきたいのであるが、これは、筆者の浅学によるものであって、相沢先生の責でないことを明らかにしておきたい。

今後、先生の病気回復を待って、本遺跡のもつ意義や本書で十分明らかに出来なかった層位の問題、石器製作技術の問題、赤城山麓における文化の編年、他の地域との文化交流の問題等について研究をしてゆかなければならないと思う。

また、これが、貴重な文化遺産の調査に携さわった者の責務と痛感するものであり、後日、かならず、以上述べた問題点及び未解明の部分を御報告したいと考えている次第である。

本遺跡の調査は、地元の多数の方々の御協力と暖かな激励によってなし得たもので、巻末ではあるが関係者の方々を記して感謝の意を表わすものである。

とりわけ、富城村長田村定吉氏、富城村教育長吉田時雄、前村長上野正之助、鶴川興業㈱社長には、深い御理解をいただき、本遺跡の調査が円滑に終了したこと、朝日新聞社の関係者ならびに同社の小島記者にはタイミングよく報道していただき、この新聞報道を機に、見ず知らずの多くの方々から御協力と激励の言葉をいただき、調査に携った我々が、師走の赤城麓の中での作業を楽しいものにさせていただき、ここに御礼を申上げるものである。

また、末筆となってしまったが種々ご指導を賜わった東北大学文学部教授芹沢長介先生にも厚く御礼を申上げる次第である。

引用・参考文献

函館博物館　「樽岸」　1956年
函館博物館　「立川」　1960年
白滝団体研究会　「白滝遺跡の研究」　1963年
芹沢　長介　「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋形彫刻刃について」(第四紀研究　1巻5号) 1959年
杉原　荘介　「日本先土器時代の研究」1974年
芹沢　長介　「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」(日本文化研究所 研究報告第2集) 1966年
戸沢　充則　「矢出川遺跡」(考古学集刊　第2巻3号) 1964年
杉原荘介・小野真一　「静岡県休場遺跡における細石器文化」(考古学集刊　第3巻2号) 1965年
杉原　荘介　「群馬県岩宿発見の石器文化」(明治大学文学部研究報告 考古学 第一冊) 1956年
関東ローム研究グループ　「関東ローム」　1965年
相沢　忠洋　「赤城山麓における関東ローム層中諸石器文化層の位置について」(第四紀研究　1巻1号) 1957年
相沢　忠洋　「北関東赤城山麓に於けるマイクロ・コアの発見」(貝塚No58) 1956年
相沢　忠洋　「赤土への執念」　1980年
群馬県教委　「群馬県の遺跡」　1963年
芹沢　長介　「長野県馬場平遺跡略報」(石器時代　No1) 1955年
若月　省吾　「和田遺跡調査概報」(笠懸村埋蔵文化財報告書　第4集) 1980年
若月　省吾　「笠懸村稲荷山遺跡」(笠懸村埋蔵文化財報告書　第3集) 1980年
中村孝三郎　「中土遺跡」(長岡市立科学博物館　考古研究室調査報告書　7) 1965年
戸沢　充則　「関東地方の先土器文化」(日本の考古学　I) 1965年
芹沢　長介　「最古の狩人たち」(古代史発掘　I) 1974年
宮城村役場　「宮城村誌」　1973年
杉原荘介・戸沢充則　「北海道白滝服部台における細石器文化」(明治大学文学部研究報告　考古学第5冊) 1975年
青森県立郷土館　「大平山元II遺跡発掘調査報告書」(青森県立郷土館調査報告　第8集) 1980年
海老原郁雄ほか　「栃木県内発見の凡字形石器」(考古学ジャーナル　No173) 1980年
後野遺跡調査団　「後野遺跡」　1976年
杉原　荘介　「群馬県武井における二つの石器文化」(明治大学文学部研究報告　考古学第7冊) 1977年
名取武光・松下　亘　「峠下遺跡」　1961年
吉崎　昌一　「タチカルシュナイ遺跡」　1973年
芹沢　長介　「石器時代の日本」　1960年
芹沢長介・吉崎昌一・鎌木義昌　「細石器問題の進展」(貝塚82、83、88、96) 1958～60年
小林　達雄　「日本列島に於ける細石刃インダストリー」(物質文化16) 1970年
桑原　護　「札滑遺跡」(日本の旧石器文化　第2巻) 1975年
加藤　稔　「越中山遺跡」(日本の旧石器文化　第2巻) 1975年
星野　芳郎　「月岡遺跡について」(考古学ジャーナル　No22) 1968年
宇野修正、上野秀一　「角二山遺跡」(日本の旧石器文化　第2巻) 1975年
加藤晋平、鶴丸俊明　「図録石器の基礎知識　I」(先土器〈上〉) 1980年

9. 発掘調査参加者一覧（順不同・敬称略）

調査担当者	相沢忠洋（赤城人類文化研究所々長）	
宮城村教育委員会	吉田時雄（教育長）	前原秀雄
	横山喜代　松村康平	
宮城村関係	上野壮之助（元村長）	
	上野健作（土地所有者）	上野光三
	前原　曠（元教育委員）	
	田島時男（村議）	神沢善之丞
	常味始次　北爪一夫（村議）	
	石橋良雄　前原至大	
	前原　豊（当時国学院大学学生）	
鵜川興業㈱関係	木暮守男　渋川滝蔵	
新里村教育委員会	須永、千本木、外1名	
その他	茂木和夫　真下　章	
	椒山　明（当時信州大学学生）	宮城村立中学生20名
赤城人類文化研究所関係	相沢千恵子　関矢　晃	
遺物整理	相沢千恵子　飯森恒子	
遺物実測図	前原　豊（現藤岡市教育委員会）	
	関矢　晃	
遺物トレース	相沢千恵子　関矢　晃	飯森恒子
写真撮影	相沢千恵子　関矢　晃	
文責	関矢　晃	

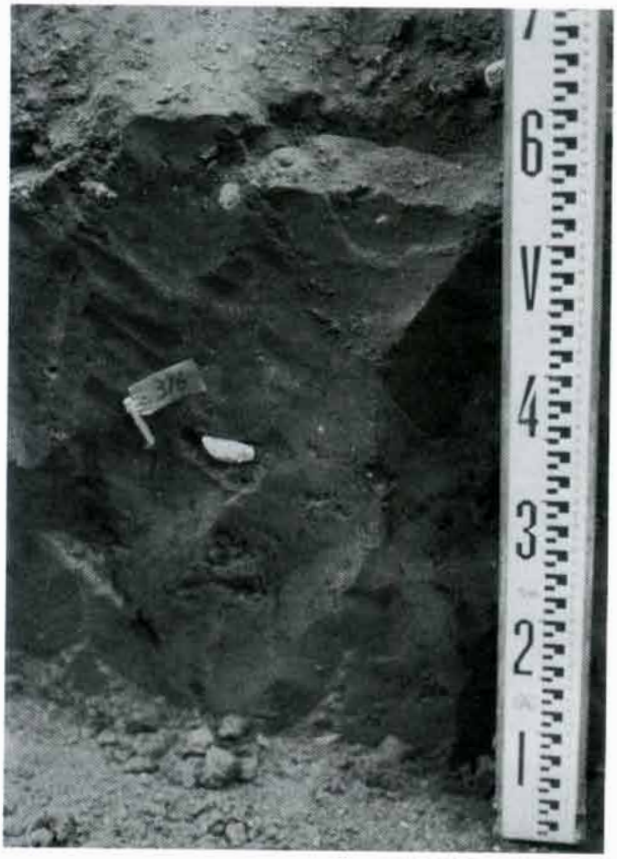
（上）桝形遺跡遠景（東方より）
（下）桝形遺跡現況（昭56、2）

図版 2

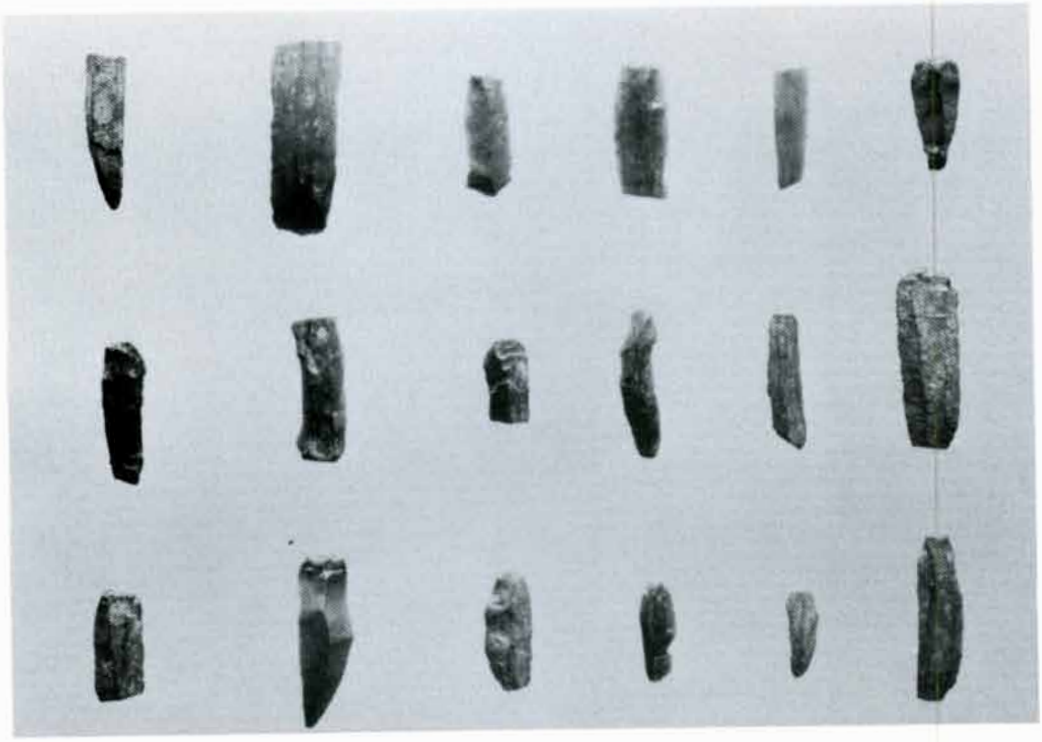
(上) 発 掘 風 景
(下) 発 掘 区 全 景

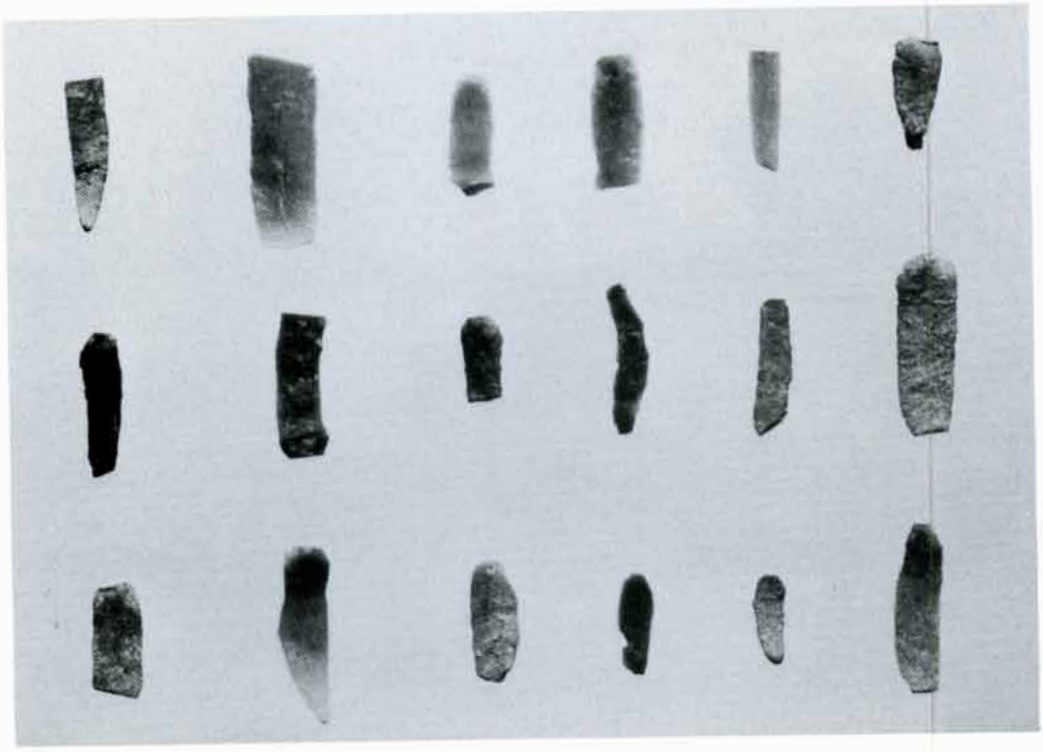
（上）**石器出土状況**（No27　細石刃、No28　ハンマーストーン）
（下）　　〃　　（No126　チョッピングトール、大型剥片）

図版 4



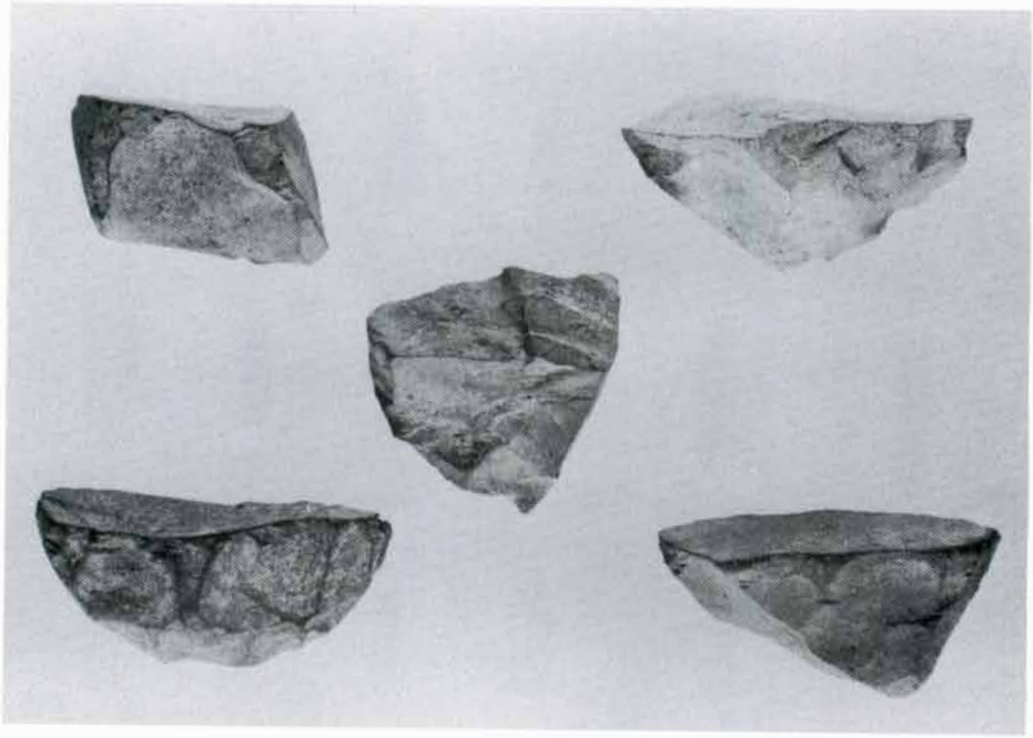
（上）**石器出土状況**（No.316　剥片）
（下）　〃　（No.91　舟底形石器）

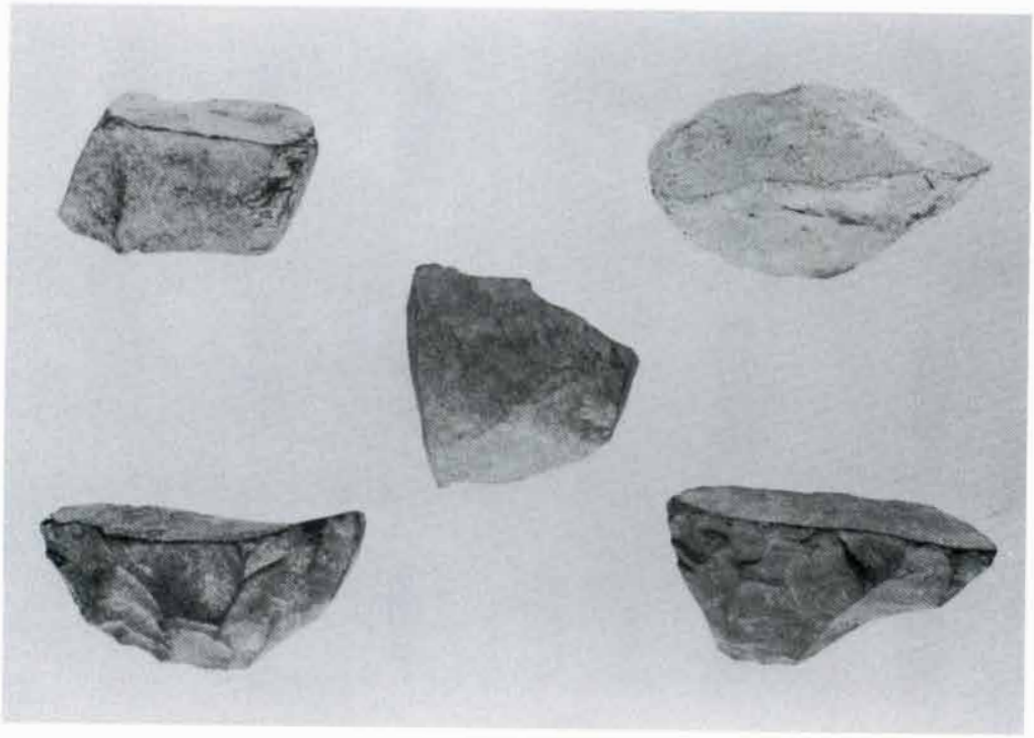




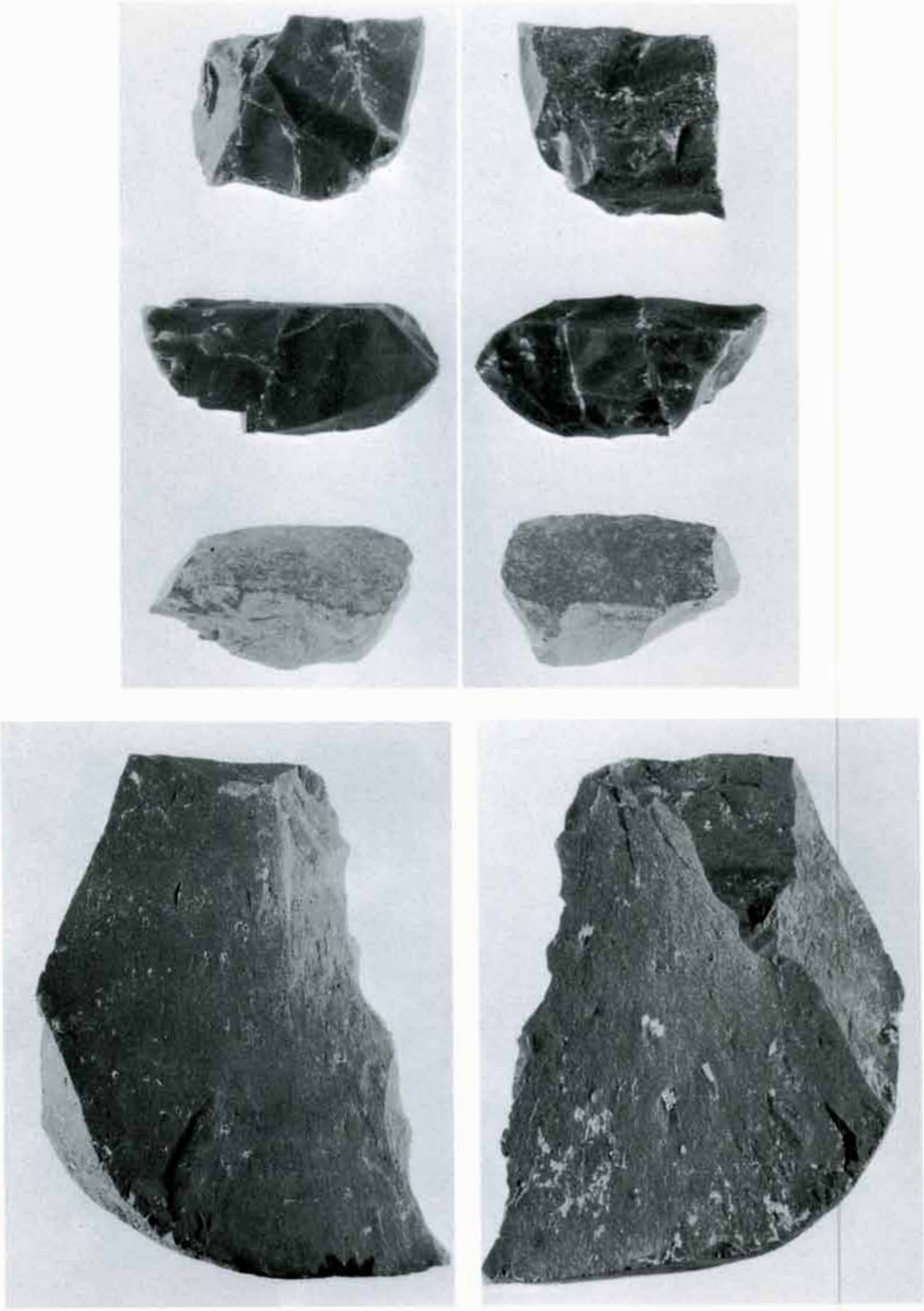
桝形遺跡出土の細石刃

図版 6



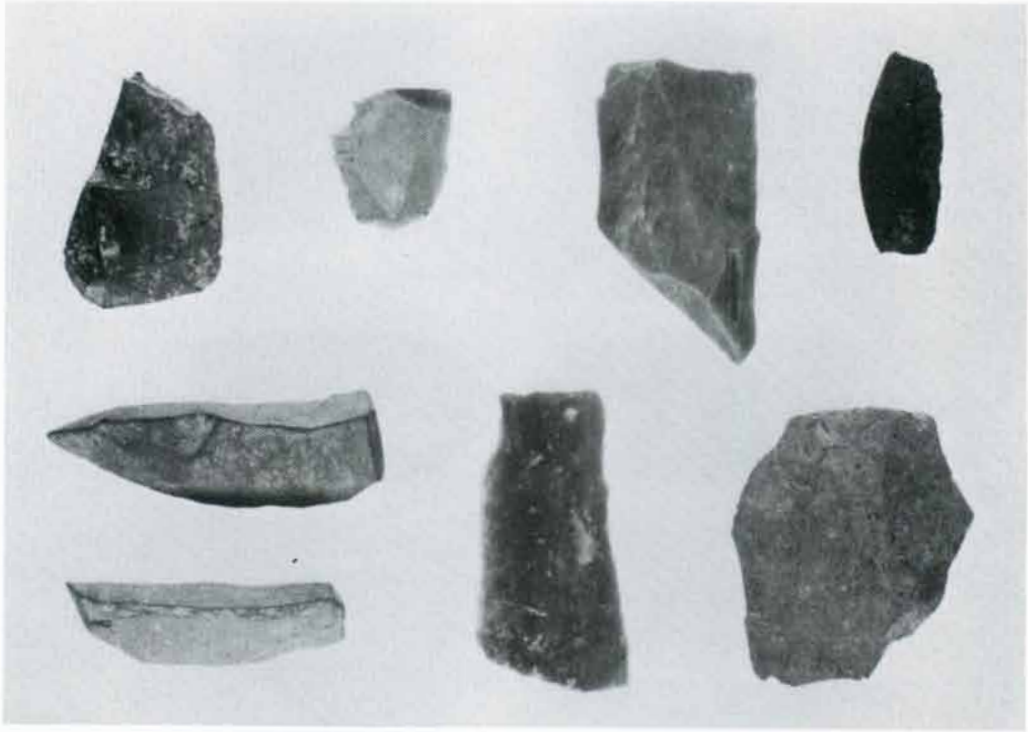


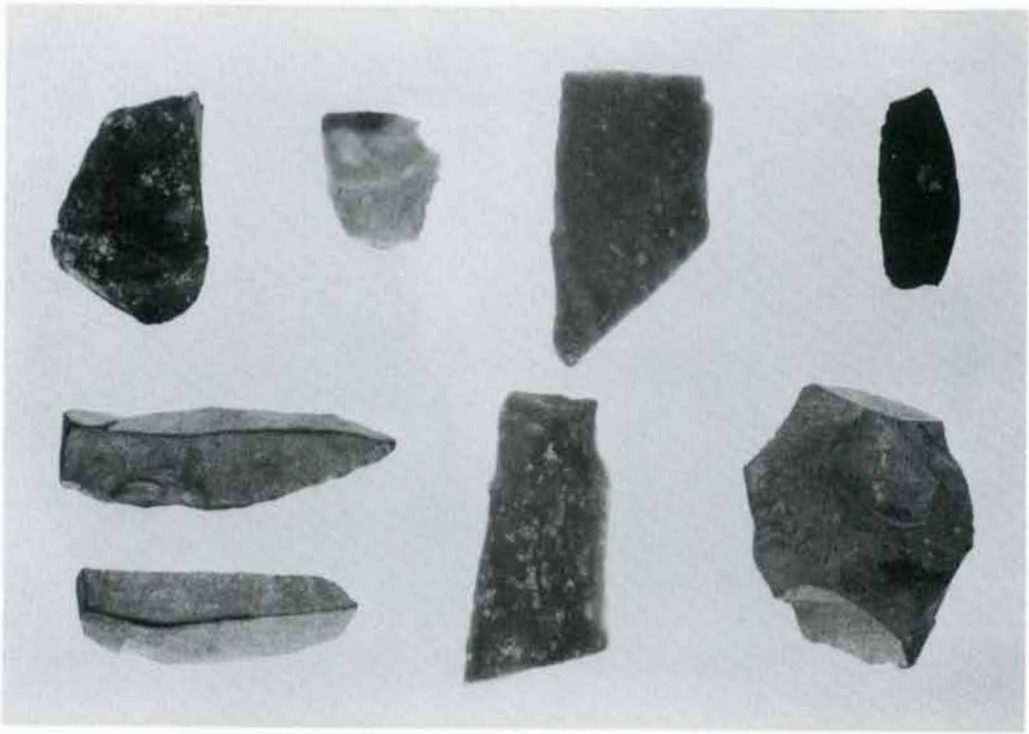
細石刃用石核



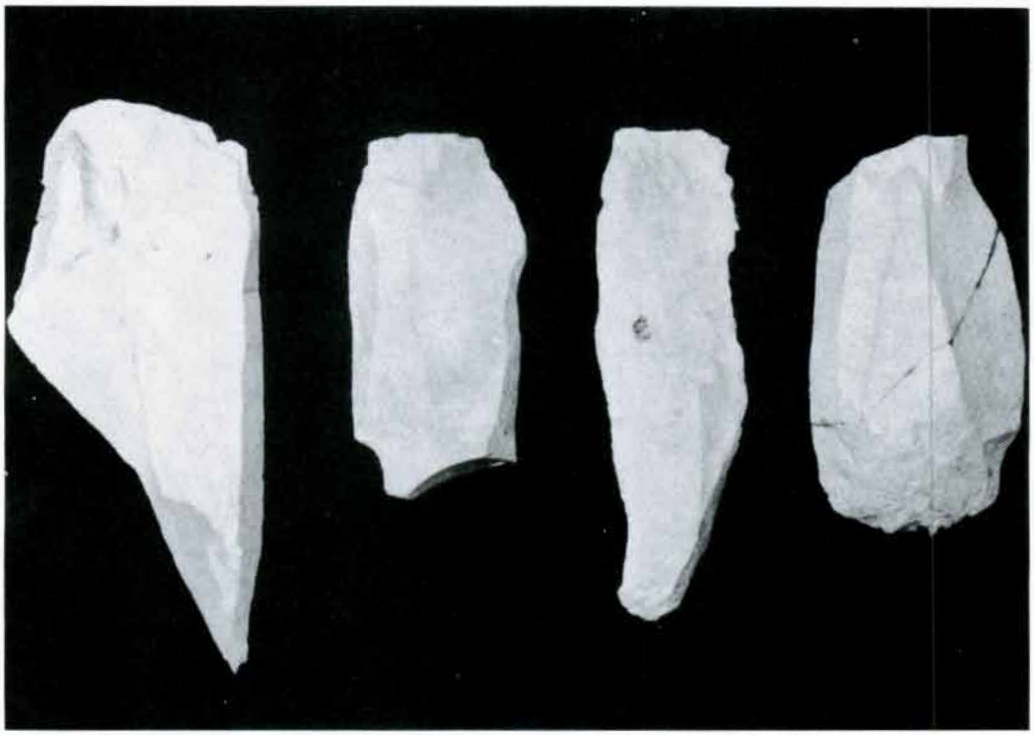
（上）細石刃用石核
（下）削　　器

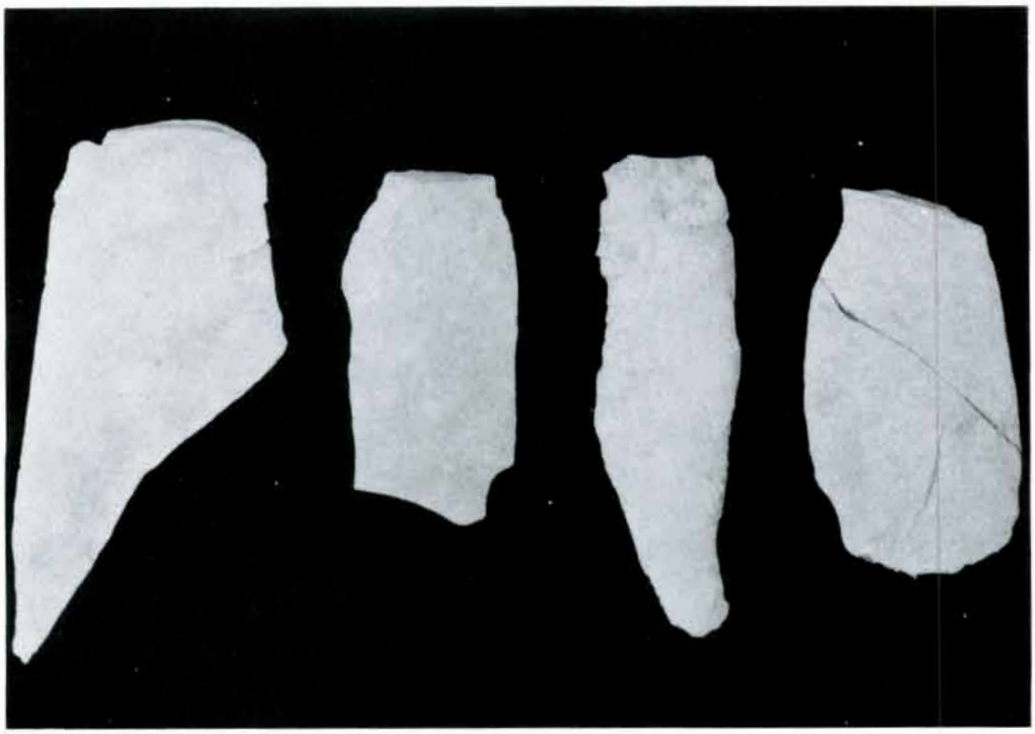
図版 8





小型石器等（彫器、掻器、削器、スキー状スポール、石刃）

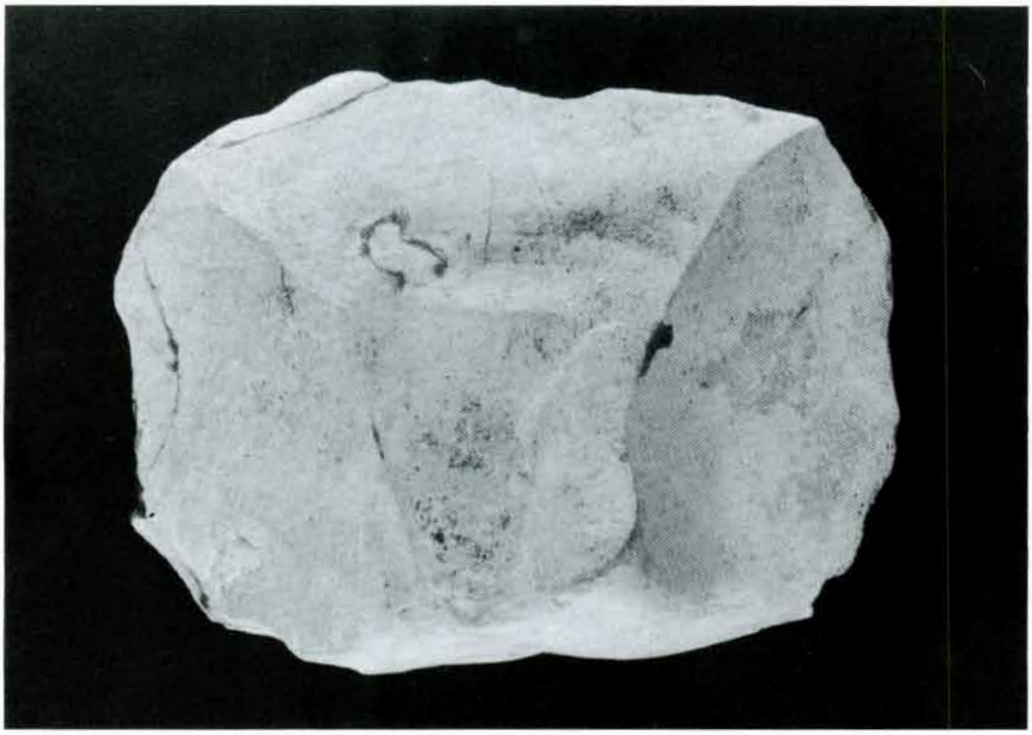


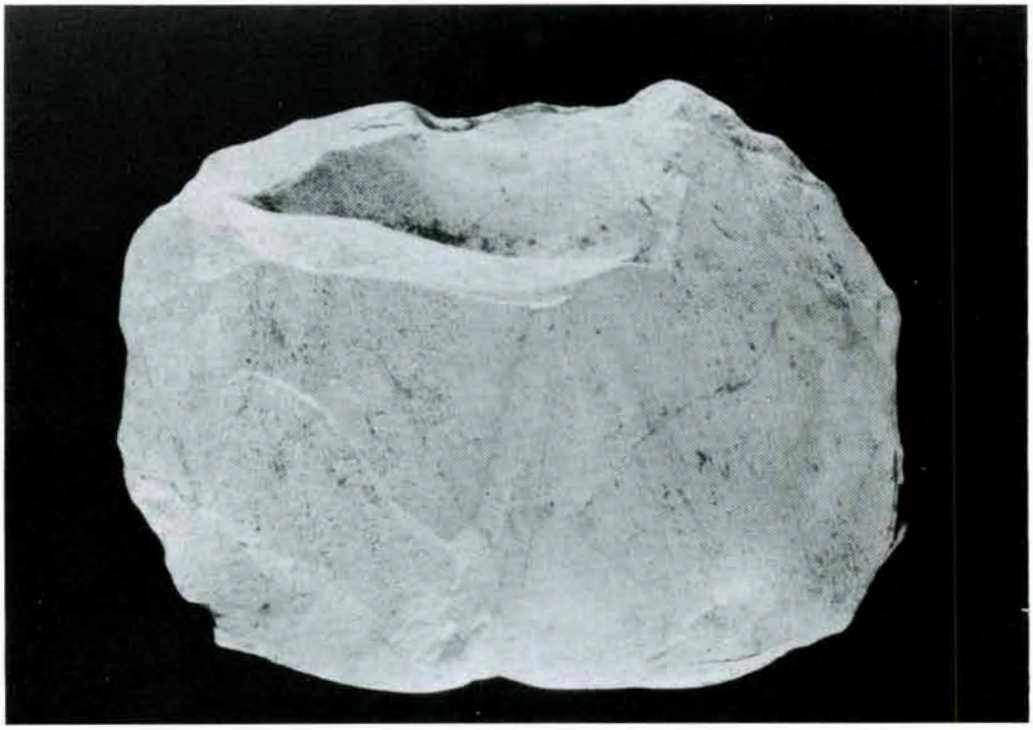


石刃及び縦長剝片利用の削器

図版10

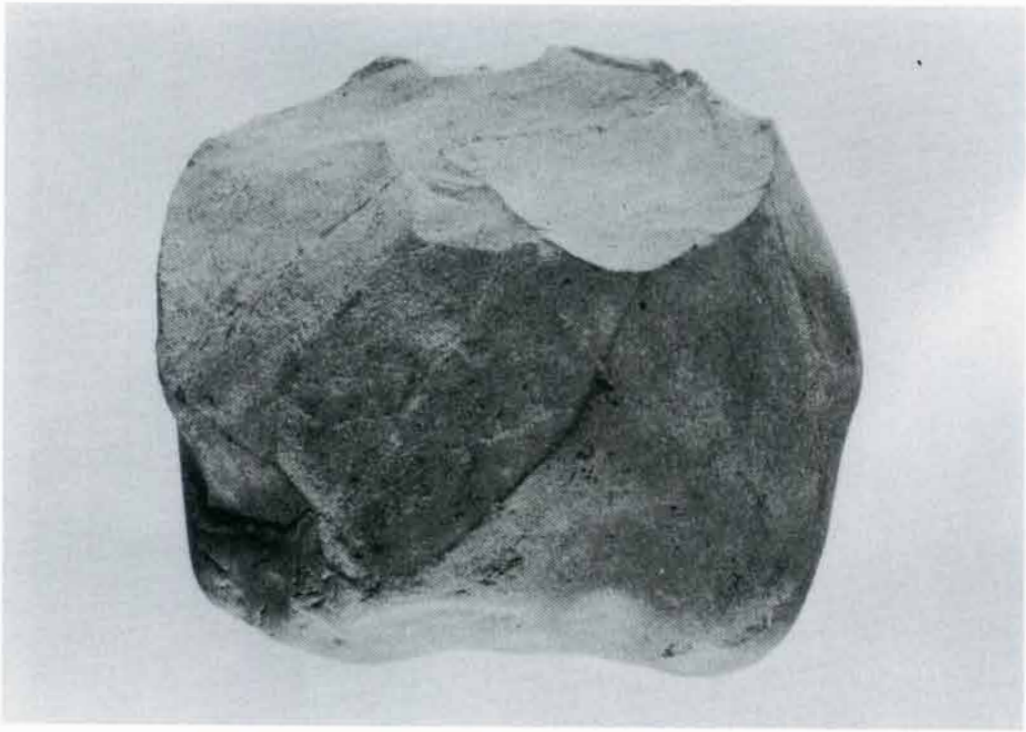
大 型 削 器

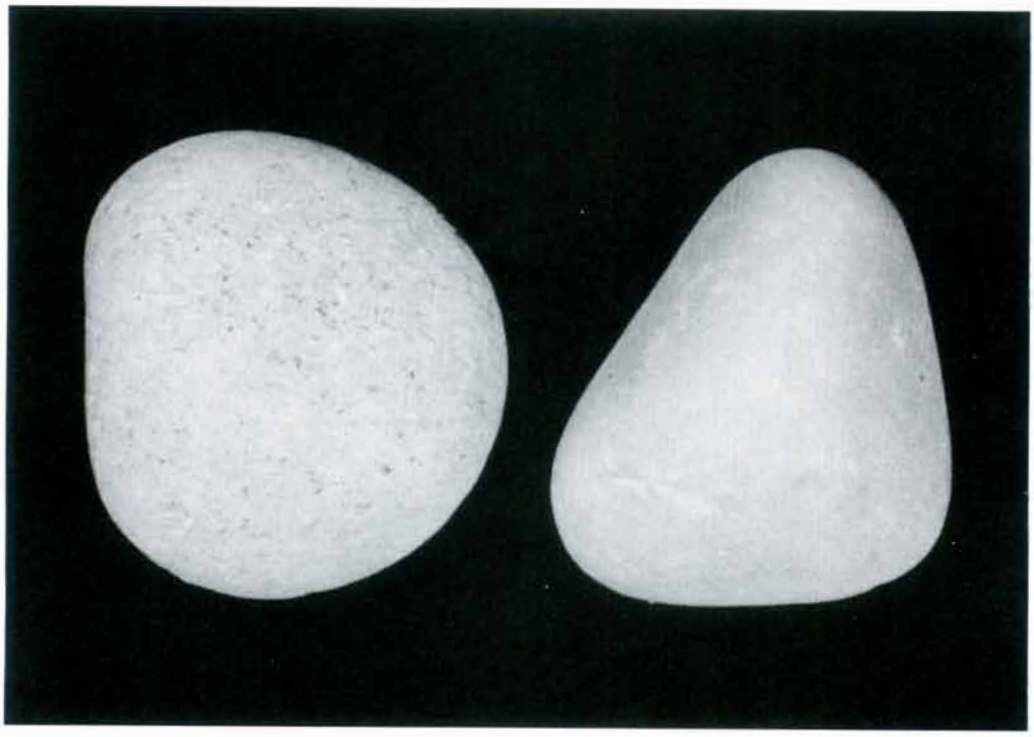




チョッピングトール

図版12





（上）チョッパー
（下）ハンマーストーン

桝形遺跡調査報告書

昭和56年8月20日　印刷
昭和56年8月25日　発行
昭和63年3月31日　2刷

編　集　宮城村教育委員会
勢多郡宮城村大字鼻毛石1711
Tel　0272—83—6886

印　刷　朝日印刷工業株式会社
前橋市元総社町67